

1. 世界に誇る九谷焼の伝統

◇九谷焼の歴史

九谷焼は、寛文(1661～1672年)初期、加賀国九谷村に良質の磁土が発見されたのを端緒に、大聖寺藩の後藤才次郎が藩主(前田利治)の保護の元に窯を築いて作ったのが最初とされている。後藤才次郎が肥前有田(現:佐賀県有田町)におもむき、磁器焼成の技術を習得したと伝えられる。この時期のものを古九谷という。また、この窯は50～60年で廃窯になってしまう。古九谷は豪放華麗な色絵磁器で、高い評価を受けている。

◇姿を消した古九谷

古九谷が生産されたのはわずか50年あまりであったという。その理由には諸説がある。

- ① 原料の陶石がなくなった。
- ② 大聖寺藩の財政が苦しくなった。
- ③ 江戸幕府の干渉と藩政の混乱
- ④ 中心人物の死去(後藤才次郎 1683年没)
- ⑤ 伊万里焼の大量流入 等

◇九谷焼中興の祖 吉田屋 豊田伝右衛門

大聖寺藩の豪商 吉田屋の豊田伝右衛門は子供の頃より学問を好み、漢文、詩文、和歌、書道はいずれも一派を構えるほどの腕前であった。絵画、筆も見事で、雅号は、柳窓・道紀・遯庵・石翁などを用いていた。

伝右衛門は、もともと加賀の人で加賀を中心に活動していたが、粟生屋源右衛門と出会い、九谷焼の再興を願った。その結果、大聖寺藩や有力な町人衆の理解と支援を得て、九谷焼の再興という偉業を成し遂げた。



◇九谷の代表的な色絵付のパターンと技法

○色絵付のパターン

・古九谷風【こくたにふう】

明暦～宝永年間(1655年頃～1710年頃) 徳川初期の戦国世相の名残を反映し、豪快で力強い骨描きと彩色が重厚で男性的。上絵に、青(緑)黄紫を用いた大胆な図柄は幾何学模様と草花山水が組み合わされている。



・木米風【もくべいふう】

文化年間(1804～1817) 徳川の成熟期に、当時名工とされた青木木米を招き再び窯が始められた。素地に赤色を塗り、人物を描き込んだ呉須赤絵写しのものが多く、いかにも和やかな感がでている。木米は、仁清、乾山と並び全国三名陶の一人に数えられている。



・吉田屋風〔よしだやふう〕

文政年間(1818~1829) 大聖寺藩の豪商、豊田家(屋号・吉田屋)が開いた吉田屋窯にちなむ。文化文政時代の雰囲気を反映し、やわらかい画風が特徴。古九谷風を最も受け継ぐ作風といわれ、青黄紫の三色を用い、花鳥・山水、小紋・草花などが描かれている。



・飯田屋風〔いいだやふう〕

天保年間(1830~1843) 飯田八郎右エ門(1805~1852)にちなむ。漢学の影響を受け、「竹林の七賢人」など、支那の風俗模様などがいきいきと描き出されている。細い赤色の線が描き出す緻密画に、随所に金彩を施し優美さを醸す。



・庄三風〔しょうざふう〕

天保12年(1841)~明治16年(1883) 九谷庄三(1816~1883) 西洋文化が入り、和洋折衷となった明治期の作風。「彩色金襴手」は、その雰囲気を映し、繊細かつ絢爛豪華な花鳥人物山水が特徴。古九谷から再興九谷までのすべての技法を取り入れており、明治以降に一世を風靡した。



・永楽風〔えいらくふう〕

慶応年間(1865~1868) 京都の永楽和全(1823~1896)の影響を受けた手法。赤の色を器全体に塗り込め、その上に金で模様を描き、絢爛豪華な雰囲気。金襴風とも呼ばれ、花鳥獣虫を一筆書するのが特徴。



○技法



・青粒〔あおちぶ〕

大正時代に広まった彩色の技法。地色の上に青粒と称する細かい緑色の点の盛り上げを並べる鮫皮のような手法。粒の大きさ、色、間隔の均一さで緻密な技術が要求される。青粒のほかに白粒、金粒もある。落ち着いた重厚感と品のよさが備わっている。



・彩釉〔さいゆう〕

緑、黄、紫、紺青の釉薬を用い、器全体を塗り埋め色の濃淡で表現する手法。2種類以上の釉薬を重ねて塗ることにより、段階的に色彩の変化を楽しむことができ、優美で鮮やかな絵柄が描き出される。



・釉裏金彩〔ゆうりきんさい〕

普通の金彩が釉薬の上に金を貼り付けるのに対して、金粉や多彩な形にカットした金箔を貼り、その上に透明な釉薬をかけて焼き付けたもの。釉薬を通して金が浮き出てくるため、絵の調子がやわらかくしっとりとした質感があり、品のよい輝きがある。



・釉裏銀彩〔ゆうりぎんさい〕

銀箔を貼り付けた上に透明釉や五彩の釉彩を塗り、焼き上げた技法。銀箔が剥がれず、錆びないという特徴をもっている。釉裏金彩と同じように、絵の調子がやわらかく、抑えた質感で上品さが漂う。

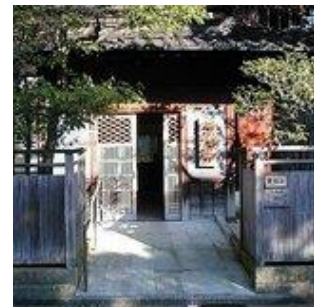
資料提供 新九谷事業協同組合

◇九谷焼を支える上絵窯

☆錦窯

「錦窯展示館」所在地：小松市大文字町95番地1

錦窯とは上絵付けに用いる窯のことを指す。その窯の構造は、外窯・内窯からなり、外窯の中に内窯を納め、その隙間に薪を焚いた熱が伝わり、内窯の中に納められた作品には直接火が当たらないようになっている。窯の様式は、マッフル窯（「マッフル」とは英語で「蒸す」の意）に属する。焼成温度は古九谷で約850～860℃、一般的な九谷焼では約780℃である。



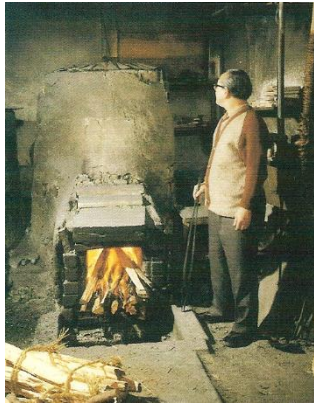
かつて、石川県(九谷焼)・佐賀県(有田焼)・京都府(京焼)をはじめ、全国各地でマッフル窯が幅広く使われていたが、温度調整が容易で扱いやすい電気窯やガス窯の普及に伴い、徐々に姿を消していった。小松市大文字町にある錦窯は、昭和7年(1932)に初代徳田八十吉が建造したものである。その後、修理・築直しを経て、現在に至る。「錦窯展示館」ではこの錦窯が残されている。



錦窯外観



錦窯の内部



二代徳田八十吉の窯焚き風景
(資料提供 小松市立錦窯展示館)



古 九 谷



若杉窯



吉田屋



松山窯

☆連房式登窯

「小松市立登窯展示館」所在地：小松市八幡己20-2

連房式登窯は、丘陵の傾斜面を階段状に整地し、焼成室を連続して構築した地上式の窯である。焚口^{たまくち}の炎は、第1房の正面側下底の通炎孔から噴出して昇炎壁にぶつかり、上昇して天井に当たった後、製品の間を通過して降下、焼成室背面床近くの通炎孔に再び吸い込まれて次の房へとめぐっていく。



登窯展示館の登窯の規模は、全長10.9m、幅2.9mで、東側に上下2段に開口する焚口と5房の燃焼室、そして煙道からなっている。焼成室は、長方形の平面を呈し通炎孔は7つ、天井はアーチ形となっており、窯幅2.2m、奥行1.47m、高さ2.1mを測る。製品の出し入れ口は、焚口から向かって左側に第1・第4・第5房が、右側に第2・第3房が開口している。これらは焼成時に塞がれる。

登窯は、焼成温度が1200℃を超える本焼の工程で使われる。燃料は松薪が主で、1回の焼成に割木800束を要し、月に1回程度焼成したという。



登窯を側面から見たところ



薪の焚口

浅蔵陶房にはかつて、八幡の丘陵地を利用したこの「登窯」、「錦窯」が広大な敷地内に幾つもあり、三代浅蔵五十吉も子供の頃から薪をくべる仕事をよく手伝ったと聞いている。

資料提供 小松市立登窯展示館

◇若杉窯 文化2(1805)年～明治8(1875)年

若杉窯は、文化2(1805)年から能美郡若杉村(現・小松市若杉町)で十村・林八兵衛が趣味で陶器を焼いた窯である。文化4(1807)年、加賀前田家12代齊広は殖産政策の一つとして窯業を再開し、京都から青木木米を招いて金沢卯辰山に春日山窯を開窯した。同行してきたのが、島原出身の陶工・本多貞吉である。文化8(1811)年、八兵衛は貞吉を招いて、若杉窯で陶器を焼いた。若杉窯の物原からは大量の陶磁器片が出土している。



本多貞吉の碑：若杉町

貞吉は、京都の寅吉、肥前平戸の平助、紀伊熊野の虎吉らと呼ばれ寄せて、製陶の能力を高め、花坂村六兵衛山に次いで、同村アサラ山でも陶石を発見し、原料の確保に努めた。その後、文化10(1813)年、阿波徳島の上絵の名工・赤絵勇次郎が招かれるなど、その陣容が充実され、作風の幅も広がっていった。

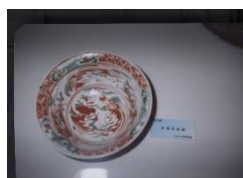
開窯から5年目の文化13(1816)年、若杉窯は加賀藩によって郡奉行の直轄となり、翌年、「若杉陶器所」と改め、規模も大きくなった。藩が春日山窯での窯業の殖産興業計画を完成させ、産業的に量産化を実現させたといえる。こうして、若杉窯は再興九谷の草分け的存在となった。

文政元(1818)年、川尻七兵衛が藩命により若杉陶器所の出納を担当することになり、翌年、貞吉が没すると、勇次郎が主工となる一方で、文政6(1823)年までには加賀藩は金沢の陶器商・橋本屋安右衛門を管理者とした。こうして、藩は藩営化を強めるため、文政3(1820)年他国からの磁器や陶器の輸入を禁止して、若杉窯の積極的な支援、助成を図った。

ところが、天保7(1836)年、若杉陶器所から出火して工場が全焼したため、陶器所は隣村の八幡に若杉村以上の広い土地と建物を得て、すべての施設を移して、さらなる量産経営を行った。なお、平成3(1991)年から行われた八幡遺跡の発掘調査で「天保三歳 施主橋本屋安右衛門」銘の香炉片が出土しており、すでに若杉村陶器所の火災以前に八幡村に本窯があったことがわかってきた。

しかし、大量生産の大工場と化していく中、これを嫌う陶画工もいて、また文政2(1819)年に本多貞吉が没すると、藩内の他の窯へ移る陶工が出てきた。彼らは主に貞吉の門人たちで、同年には藪六右衛門が小野村に戻って小野窯を、翌年には粟生屋源右衛門が小松に戻り楽焼の窯をそれぞれ開き、同5(1822)年には春日山窯を復興した民山窯に山上屋松次郎が移った。次から次へと主力の陶工を失うことになった。

さらに、天保8(1837)年勇次郎が主工を退いたこと、小野窯(藪六右衛門)が良品を作り出したことなどが影響して、次第に若杉陶器所はその勢いをなくして行った。明治2(1869)年版籍奉還による藩窯ではなくなり、若杉(橋本屋)安右衛門が民窯として経営にあたったが、明治8(1875)年に廃窯となった。



呉須赤絵鉢



染付桐鳳凰図皿



色絵鳳凰文輪花中皿

◇若杉窯の発掘調査

昭和45(1970)年より始まった九谷古窯跡発掘調査により、にわかに関心が高まるにつれ、若杉古窯にも学術調査の期待が大きくなった。

そして、若杉古窯跡周辺で宅地造成計画が進んでいることなどを考慮した小松市教育委員会では、石川県の補助を受け、「若杉古窯跡発掘調査委員会」を発足させ、昭和47(1972)年7月21日より8月9日までの延べ17日間にわたり、発掘調査を実施した。調査は、陶磁器片が比較的多く散乱する二地点(第一地点は丘陵の最西部に位置し、最初に発掘調査を実施した地点。第二地点は連房式登窯が検出された地点)で行われた。

連房式登窯の燃焼室とそれに続く燃成室第1房～第4房の1部分が検出された。主軸を南北にとり、全体の傾斜角は約16度を測る。燃焼室は、焚口からカーブを描いて大きく広がり、最大の幅は3.8mとなる。一房は、床幅約2.4m、砂床の奥行きは7.3m、最大の幅は燃焼室と同じと考えられる。出土した陶磁器破片は、染付や型物、色絵では赤絵細描きのほか古九谷焼青手様式もみられ、他に白磁・青磁・瑠璃釉・灰釉・鉄釉・緑釉など。約3万点以上にのぼる。出土器で最も多いのは陶器である。



若杉窯の発掘調査

◇八幡遺跡(八幡若杉窯・八幡窯)の発掘調査

平成3年から7年(1991-1995)にかけて、小松バイパス建設に伴い、石川県埋蔵文化財保存協会によって発掘調査が行われた。

燃焼室および第1房の幅は約2.6mだが、窯室に近いと考えられる焼成室の幅は約5.2mとかなり広がっている。素焼品の出土も多く、焼成室で素焼きが行われた。また、物原^{ものばら}からは上絵色見片も出土している。右の写真は八幡窯閉窯後に築かれ、昭和40年頃まで使われていた登窯の内部で、現在は小松市立登窯展示館となっている。主に「生地」の生産を行っていた。



◇九谷焼ができるまで



1 採石
小松市花坂 山陶石場
で採取



2 粉碎
陶石を細かくスタン
パーで砕く



3 水簸(すいひ)
精粉になった陶石を
水に浸し鉄分などの
浮遊物を取る



4 坏土(はいど)
余分な水分を除き、
適当な軟らかさにす
る



5 土もみ
ヒビ・ヒズミの原因
となる陶土内の空気
泡をなくする



6 成形
円形状のものはロク
ロを中心に、角形や
置物などの複雑なも
のは手びねりなどで
形を作る



7 乾燥・仕上
高台、外側の削り
や、つまみ作り、縁
仕上げなど



8 素焼
約800度で8時間焼成
すると、肌色になる



9 下絵焼
主成分が酸化コバル
トの染付呉須(紺)
で絵をほどこす



10 施釉(せゆ)
白釉は焼成後、ガラ
ス質で透明となり、
陶磁器表面を覆う
(釉薬がけ)



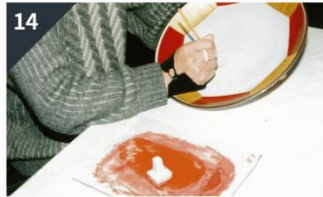
11 本窯
1300度の高熱で15時
間以上焼成する



12 上絵付
呉須(ごす)による
骨描きや、五彩の上
絵の具による彩色



13 上絵窯
800~1000度の間の上
絵窯による焼成



14 錦窯(金窯)
金彩、銀彩をほどこ
し、金窯(400度)で
焼成する

能美九谷焼美術館 Web ページより

◇焼成とは

焼成は、基本的に素焼(700~900℃)と本焼(1200~1300℃)の工程に分かれる。九谷磁器杯土(陶土)を焼成すると通常17%ほど収縮する。成形した乾燥品に直接釉薬をかけて本焼する「生がけ」という方法もあるが、普通は、収縮や絵の具の耐火度を考慮し、施釉や絵付け前に「素地」として焼成する。素地には「素焼」段階のものと、そのまま連続して本焼きの温度まで上げた「締焼」、素地に透明の釉薬をかけて再び焼成(本焼)した「白磁」がある。

また、焼成時に酸素を遮断する還元焰焼成と酸素を供給する酸化焰焼成、あるいはその中間など、それぞれ絵付けや仕上がりの種類に応じて使い分けられる。連房式登窯では、主にこの絵付け用素地を生産していた。上絵付けをされたものは、上絵窯(錦窯)で絵の具の定着あるいは発色に適した温度(700~900℃)で再度の焼成を受けることになる。耐火度の低い金彩は、さらに低い温度の金窯として焼成されることもある。

①青磁

素焼素地



青磁釉がけのみ

②染付

素焼素地に呉須
で下絵付け



白透明釉がけ

③交趾

締焼素地に交
趾の下絵付け



和絵の具で塗
埋

④白磁

白磁酸化焼成素
地



和絵の具の五彩
と金で上絵付け

⑤白磁還元焼 成素地



洋絵の具で色下
地塗と金塗

- **染付** …… 素焼きの素地に呉須と呼ばれるコバルトを含んだ絵具で模様を描き、白(透明)釉をかけて焼成したもの。釉薬の下で呉須は藍色に発色する。
- **交趾** …… 交趾とはベトナム近辺地域を指し、昔の貿易陶磁に由来する。九谷焼置物の絵付けでいう交趾は、締焼の素地に、九谷焼独特の透明感のある深い色合いの釉薬を部位単位に配色したもの。
- **色絵** …… 「赤絵」「五彩」とも呼び、本焼き素地に多彩な絵具で上絵付けしたもの。
- **錦盛** …… 洋絵の具の特性を利用した技法。白磁素地に色下地を塗り、その上にカップと呼ばれる先端の細い絵の具の絞り袋を使って、盛り上がった繊細な線描文様で埋め尽くす。

◇絵付とは

絵付を施すのが釉薬をかける前か後かによって、「下絵付け」と「上絵付け」にわけられる。下絵付けの代表は藍色に発色する呉須を使った「染付」で、素焼素地に描かれた絵が透明な釉薬を通して浮き出る。青磁など、発色する釉薬のみで仕上げとする「本窯色釉」もある。上絵付けは、白磁の素地に絵付けを行う。絵の具には、和絵の具と洋絵の具があり、絵付けの種類や画風によって使い分けられる。前者は焼成により透明感のある別の色に変化し、後者は色変化がほとんどなく不透明である。

九谷焼色付けの基本的な手法は、呉須と呼ばれる黒褐色の釉薬で「骨描き」（絵文様の輪郭線）を描いた後、その上から和絵の具で配色する。透明感のある色彩が下地の骨描きと一体化した絵となる。

絵付には染付や色絵（五彩）、青手の他、釉裏彩、交趾、錦盛、金襴手など、多様な手法が存在する。また、近世各窯や名工の名前から、古九谷風、木米風、吉田屋風、飯田屋風、庄三風、永楽風などが伝統的画風として知られている。

◇陶芸における「文化勲章」・「文化功労者」・「芸術院会員」

石川県は、芸術院会員や文化勲章受章者・文化功労者を工芸分野にも輩出している。

日本芸術院とは、美術・文芸・音楽・演劇・舞踏等芸術各分野の優れた芸術家を優遇顕彰するために設置された栄誉機関であり、芸術院会員は、芸術上の功績が顕著な芸術家として、会員の推薦による候補者の中から選考委員会の選挙と総会の承認によって選ばれる。また、文化勲章・文化功労者は文部科学省人事課が選んだ選考委員によって選ばれる。



釉彩秋の松花釉

二代 浅蔵五十吉

◇陶芸における「無形文化財」と「重要無形文化財」（人間国宝）

戦争のために崩壊した「伝統工芸」を復興・再現させる目的で、文化財保護法が昭和25(1950年)に制定された。そのなかで、「有形文化財」は、建造物・絵画・彫刻・工芸品などの物、「無形文化財」は、演劇・芸能などの演技や工芸品をつくる技術（わざ）とされた。昭和28年、初代徳田八十吉が、国の「無形文化財」の選定を受けている。その時、提出を求められた作品制作中の昭和29年に、文化財保護法が変わり、「重要無形文化財」（人間国宝）が制定された。この作品が完成し、文部省に提出されたのが昭和30（1955）年であるが、初代徳田八十吉は指定年の昭和28(1953)年に従い、「無形文化財」となっている。日本の伝統的な芸能や工芸技術のうち、芸術上または歴史上で特に高い技芸や技術を高度に体得している個人または集団の伝統技術を後世につたえるために認定されるのが「重要無形文化財保持者(団体)」いわゆる「人間国宝」である。

「人間国宝」には、その卓越した貴重な技を保持し伝承することが求められる。

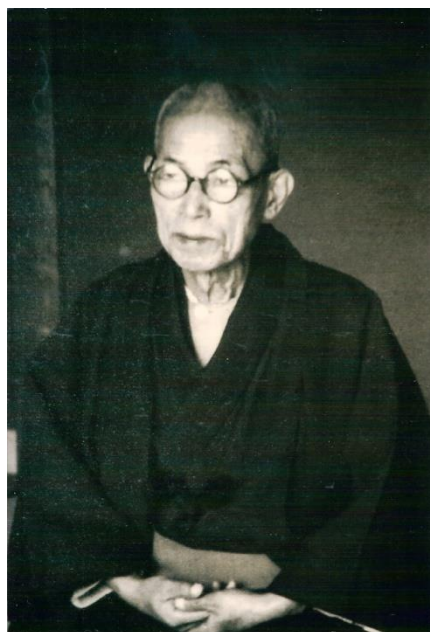
三代 徳田 八十吉（さいゆうじき彩釉磁器）

吉田 美統（ゆうりきんさい釉裏金彩）

2. 無冠の太夫 初代 ^{とくだ や そきち} 徳田 八十吉 (国の無形文化財指定)

◇生い立ち

初代八十吉は、明治6(1873)年11月20日、石川県能美郡小松大文字町(現：石川県小松市大文字町)の染色業の亀屋伊助の長男として生まれた。八十吉は子供のころから病弱であったが、学業優秀で絵の上手な子供だった。当時は、小学校を4年で卒業して家業を継ぐものが多い中、高等科まで進み、明治20(1887)年、芦城小学校高等科を卒業した。卒業試験では、1等の成績を収めた。明治10(1877)年当時、大工の日当が10～13銭であるのに陶画工は20～30銭と高給のため、男の子には絵画を習わし、絵心のある者は画工にという風潮が小松にあった。八十吉は14歳から松本佐平の弟子であった兄二本喜助が工場主任を務める小松陶画第一分業工場(小松市大文字町)を手伝う。しかし、工場で作るのは伊万里写しの輸出用の「花生けの底に穴が開いた」ランプ台が多か



在りし日の 初代 徳田八十吉

った。当時古九谷の需要はほとんどなく、需要の高かった伊万里写しや有田焼がほとんどであった。加えて、夜学で狩野派の絵師のもとに通い、腕を磨いていく。徒弟夜学所の15・16歳を対象とする幼年部で5・6人の仲間とともに、荒木探令の指導を受け、夜な夜な画の稽古に励んだ。

明治23(1890)年、17歳でさらなる研鑽を積むために松本佐平に入門する。この頃、目にし



古九谷欽慕 松鶴図九角皿

た「古九谷」や「吉田屋」の青手作品に強く惹かれていった。八十吉は画工の徒弟進級試験において卒業試験に合格し、1人前の陶画工としての資格を得たことにより、明治26(1893)年独立する。そして、古九谷や、吉田屋の再現という自らの道を求め、素地や釉薬についてさらに学ぼうと自分の足で歩み始めた。

古九谷継承の功績が国に認められ、昭和28(1953)年に国の無形文化財に選定される。しかし翌年の文化財保護法の改正にともない、82歳の八十吉は技術保存記録の提出を求められた。早速取り組むが、素地の完成が遅れたこともあり、完成が大幅に遅れた。そして提出後倒れ、帰らぬ人となった。その頃の八十吉は年には勝てず、集中力を必要とする技術保存記録の作成に「思うように鶴が舞い降りてくれない…」と呟いていたそうである。



文部省に提出した上の図案画

明治時代、古九谷五彩を復元し、「古九谷」、「吉田屋」の再生に生涯をかけたのが初代徳田八十吉である。少年の頃に抱いた古九谷・吉田屋への憧憬は、近代的作家「八十吉」の誕生へと昇華した。現代に繋がる新時代の幕開けである。彼の生涯を語る時、父伊助

が家計を支え続け、明治20(1887)年ごろからの10年間で八十吉を生んだといっても過言ではない。

晩年釉薬の調合が出来なくなった初代は、調合をよく三代に頼んだという。分量を紙に書き、亡くなるまでの半年間に14・15枚にもなったという。そして釉薬調合割合を記した「黒い手帳」の話は有名である。釉薬の調合を暗号で記入し、「その暗号を解読することは今もって容易でなく、“簡単にまねさせんぞ”という偉大な祖父の意気込みが感じられる。簡単に偽物を作られてたまるかと思っていることでしょう」と三代は祖父を振り返る。

◇作風 (角福時代からの脱却)

八十吉は日本画の荒木探令・山本永暉に学び、のち義兄である松本佐平の下で九谷焼絵付けを習得し、「古九谷」の再現を目指して色釉の調合技法について研究し、その結果ビードロ釉・碧明釉(緑系)、欽朗釉(黒系)、深厚耀変など独自の釉薬を開発した。

八十吉は消えてしまった「古九谷」・「吉田屋」の技術を研究し、ついに一定の到達点に達した。金沢の陶器市場で角福の皿(自作)が「吉田屋」の本物として雑誌に取り上げられているのを見て



古九谷欽慕幾何文様鉢



初代八十吉が愛蔵した吉田屋菊桐文輪花鉢

「ありゃ！むさや！」と慌てたという。かつて八十吉に絵の手ほどきをした師匠達は「人のまねをすることならんぞ。買う人が難儀しっし」と常々言っていたというから、さぞかし困ったことであろう。九谷焼は昔から底の部分に「福」の字が記されている。八十吉も一陶工として「福」の銘を記していたが、自分の作品が「吉田屋」の本物と間違えられたことをきっかけに、独自の銘「九谷八十吉」を用いるようになる。“陶芸家・徳田八十吉”の誕生である。当時は一職人が作品に自分の名を冠することなどおこがましかった時代。「売れんから「福」の銘に変えてくれ」と業者から言われたという。

◇古九谷

（「九谷焼」と「古九谷」の違いは何か？）

「古九谷」とは、江戸時代初期に約50年の間だけ作られた陶器をいう。濃いグリーンを基調としたつややかな色調、鶴などの緻密で古典的な絵柄、幾何学模様。深みのある色合いが素人目にみてもたいへん華麗な陶器である。その古九谷を作る技術を研究しつづけたのが初代徳田八十吉である。明治期、八十吉が古九谷の研究を始めた頃、「青九谷」を止め、外国へ輸出するための陶器作りが盛んであった。たくさんの職人が、九谷の地でありながら「伊万里写し」の生産が主流になっていた。当時、伊万里写し等は、九谷焼よりも人気がありよく売れたからであった。

福の作品と九谷八十吉の作品および初代が愛した古九谷・吉田屋の作品の中から



古九谷きんぼ 欽慕 小皿鉢



福の銘



吉田屋きんぼ 欽慕 龍文大平鉢



九谷八十吉の銘



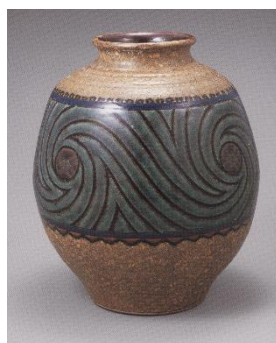
古九谷きくずひらばち 菊図平鉢：江戸 17 世紀



吉田屋おうせきこうちょうりょうずひらばち 黄石公張良図平鉢：江戸 19 世紀

◇技法の創出

新しい釉薬の開発と図案の革新



しんこうゆうようへんかびん
深厚釉耀変花瓶

初代八十吉は、明治37年頃から「明瑞堂」の後援を受け本格的に古九谷に取り組む。素地は江沼郡山代村の大蔵寿楽から取り寄せた古九谷風のものであった。「当時古九谷は高くて商売にならないこともあり、古九谷の研究をしていた自分に白羽の矢を立て古九谷写しを依頼した」と後に語っている。

さて、本格的に上絵と取り組み出した八十吉は、古九谷再現のため釉薬の研究に没頭、その過程で古九谷風の色に明朗さを加えた深厚釉や深和黄釉、ピロード釉、碧明釉、深厚耀変など多様な釉薬を開発していく。大正5(1916)年、深厚釉の開発に成功、石川県美術工芸品展

覧会に《葡萄模様花瓶》を出品し、1等賞を獲得したことで、これまでの実績とあいまって上絵付けの第一人者としての名声を得た。八十吉は明瑞堂の支援を受け、古九谷・吉田屋の収集家を歴訪。小松をはじめ、金沢・大聖寺に出向き作品を見せてもらい、多くの絵柄を写した。

しかしながら、銘を入れたことをきっかけに古九谷・吉田屋の写しから大きく展開し、それらは八十吉の中で昇華した図案として広がる。それは既存の図案を写すのではなく、制作者と一体化した「創造」の世界である。「角福」から「八十吉」への変化は、「写し」から「創造」への変化であったといえる。

1. 日本画として再構成

徳田陶房にも江戸時代以降の多数の版本が残されており、絵付け図案の参考として活用されていたことは間違いない。このような、絵本の活用、引用は、絵画の世界のみならず、広く蒔絵など工芸分野全般にわたり、古九谷や吉田屋窯でもおこなわれている。八十吉の作品は画譜に忠実にその主題を描いているが、唐様のイメージが払拭され和様に変化している。人物や山水が一度消化され日本画として再構成されている。日本画に習熟した八十吉の1つの成果といえる。

2. 縁と内の構成

古九谷にも縁と内を組み合わせた図案が用いられているが、八十吉はその組み合わせを変えたり、縁を設けたりして古九谷風・吉田屋風を表現しようとした。決して古九谷・吉田屋の「写し」を求めたのではなく、あえて「風」の表現を生み出したところが八十吉らしい。

3. 図案の再構成

《古九谷 青手団扇文大皿》を再び図案化し、縁をもうけて青手古九谷風に作り直したのが《古九谷写意 団扇図輪花台鉢》である。もとの図案を展開し、団扇図を発展させて別の図案が創り出されている。《古九谷欽慕 山水図平鉢》、《吉田屋欽慕 扇図皿》は、この図案をさらに単純化し、縁と内の構成、つまりデザインの組み合わせにより、古九谷、吉田屋二つの作風の作品に再構成したものである。



古九谷 青手団扇文大皿



古九谷写意 団扇図輪花台鉢



古九谷欽慕 山水図平鉢



吉田屋欽慕 扇図皿

4. 陶画と絵画—表裏一体の世界観

表はあくまでも九谷としての陶画を描きながら、裏面にあっと驚くような絵画的な世界が広がっている。たとえば、《古九谷 色絵軍扇散山水人物図平鉢》と《古九谷 欽慕 色絵軍扇散山水人物図平鉢》をみると、表面は本歌と写しの関係に他ならない。しかし、後者の裏面をみると、梅の枝が描かれている。表面の、色や緻密な描画だけではなく、裏面のこの加飾に、八十吉らしさが表現されている。表面の意匠と呼応して、表裏一体となって一つの世界を表現しているのである。



古九谷 色絵軍扇散山水人物図平鉢



(裏面)



古九谷欽慕
色絵軍扇散山水人物図平鉢



(裏面)

◇初代との思い出（三代 徳田八十吉氏の回顧録から）

私が大学2年生の秋、春の県展に灰皿を出品し、入選して勢い込んでいたのに、日展に落選してくしゅんとしていた。祖父から「あの作品を3,000円で買いたい人がいる」と言われて喜んで売った。もらった金は3日ほどで遊びに使ってしまった。祖父が亡くなって10年ぐらいたって、青年会議所の友人の花屋さんで、偶然棚の上によく似た作品を見つけた。降ろしてもらい埃を払ったらあの日展落選作。「どうしてこんなものがあるんだ?」「オレは知らん、おやじに聞け」「これはおじじが持ってきて、まちゃん(三代)が作ったと置いて行った」そのとき初めて、お金は祖父が自分で出してくれたことがわかって泣いた。これに似た話は幾つもある。その度に祖父の存在がありがたかった。



初代と三代八十吉

そして、家を出ていた私は、祖父の晩年釉薬の調合に度々呼びもどされた。祖父から家業を継ぐようにと言われたことがない。しかしながら、事あるごとに陰ながら支えてくれていたことを後になって知った。やる気になっている孫に好きにやらせたいと思っていたのではないだろうか。祖父は「この色だいじにしておけ、一生めし食える。とうちゃんにもいうめえぞ」と釉薬の調合を手伝う私に言った。祖父は亡くなる前年、「自分の銘を入れて幸せがよかった」と語っている。「自分よりえらいものはいっぱいおった。自分は長生きしただけで、そんな偉いもんじゃない・・・」角福銘のため先輩・友人の名が九谷焼の歴史の中に消えた。いわば祖父は「角福」時代を完結させた人なのである。

初代徳田八十吉作品の中から古九谷風・吉田屋風以外の作品の紹介
(斬新な現代風の陶板や生き生きとした鶏の表情、得意とした日本画の作品)



高山植物磁器色紙



わいけい
矮鶏置物



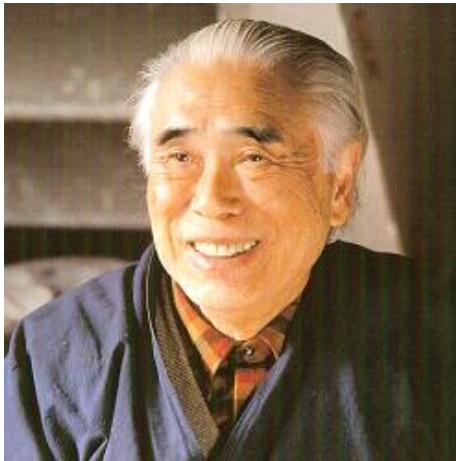
山水図

文化勲章受章者であり文化功労者でもあった二代浅蔵五十吉は初代徳田八十吉の元から巣立っている。三代浅蔵五十吉も「初代八十吉さんがいたから今の九谷焼がある」とかつて取材に訪れた生徒達に話してくれた。平成18年10月に開催された「初代徳田八十吉」展では初代の作品はもとより、生前彼がこよなく愛した「古九谷」や「吉田屋」の作品が数多く展示された。

参考文献：「特別展 歿後50年 初代 徳田八十吉
古九谷・吉田屋の再現にかけた生涯」図録
発行：小松市立博物館

3. 文化勲章・文化功労者・日本芸術院会員 二代 あさくら いそきち 浅蔵 五十吉

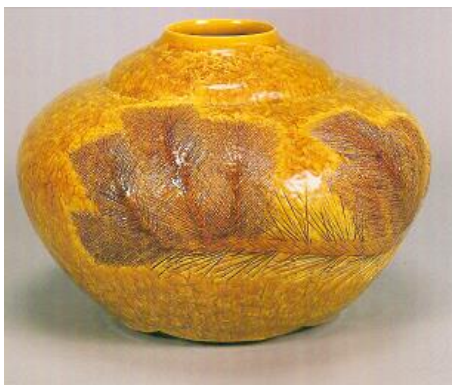
◇生い立ち



二代浅蔵五十吉(本名：浅蔵与作)は、大正2(1913)年に寺井町に生まれる。その後、九谷焼職人である宮本磯吉と母つぎとが再婚し、母方の浅蔵姓を名乗ることから後の浅蔵五十吉が誕生する。5歳で加賀八幡に移り住む。八幡は、元々九谷焼の置物作りの地として栄えていた。磯吉は、この八幡地区で、主として素地を生産する窯元であった。この窯元で育った浅蔵五十吉は、小さい頃から焼き物を仕事として生活していくのは当然だと考え、この道に進むことを決意していた。父の磯吉は、与作(後の五十吉)に対し、「いかに素地を立派に作っても、所詮それに上絵付けが施されると、

上絵付けを行った人の作品になり、また、素地が逆に悪くても、上絵付けで1級品の作品に仕上げることができるから、上絵付けの勉強だけはしっかりやる必要がある」と常々口にしてきた。息子を職人で終わらせたくないという親心がある。息子の五十吉の作家活動に大きく影響を及ぼすことになる。

小学校を卒業して間もなく、小松で上絵付けの画工として著名であった初代徳田八十吉について、上絵付けの修行を積むことになる。弟子入りしたその頃には、職人が5名おり、与作少年は勿論最年少であり、従って、工房における雑用のすべては与作少年の分担するところとなり、朝早くから夜遅くまでただ黙々と働いたという。当時の師弟関係は下積の中から師匠の技術を修得するものであり、手取り足取りの指導を受けるものではなかったという。その時代に修得した色作りの修行が、その後の五十吉を生み出した。五十吉は、20歳で徴兵されるまで修行に励む。戦争中も、時間があればスケッチをし、絵の勉強を続けていた。敗戦の昭和20(1945)年に帰郷する。それまで書きためていたスケッチブックを手に、再び徳田工房を訪れた与作に、師は「私と違うことをしないと私を超えられない」と、自分からの独立を強く勧めたという。五十吉は、31歳で今の地に浅蔵陶房を開くこととなり、昭和21(1946)年に日展初入選を果たす。昭和22(1947)年に磯吉死去(66歳)に伴い、本名与作改め五十吉と改名し、作家活動が始まる。



彩磁彩暁ノ松飾壺



瑞鳥 飾皿

◇作家への道

五十吉は徳田八十吉から伝統的な上絵付けの技術を学んだが、さらに現代的な上絵付けの優れた感覚を身につけるため、北出塔次郎(1898～1968)に師事することになった。北出工房が富本憲吉と深い関わりのある所から強い影響を受けた。北出塔次郎は現代的な上絵画風、造形感覚を身につけた著名な陶芸家であった。金沢市が戦後すぐ設立した金沢美術工芸専門学校(現在の金沢美術工芸大学)の設立にも参加し、みずから教授となって学生を指導し、また九谷上絵の現代的な改革運動を推し進めていた指導者であった。浅蔵は、北出から主に陶芸作品としての図案構成の技法を学び、心の表現法を学んだという。北出は浅蔵に「上絵の基本は写生から始まるが、単に対象を写し取り、文様や形でどう表現するかということではなく、象徴的に精神を表現することである」と常に言い聞かせたという。そして、作家活動における、中央との太い人脈の大切さを繰り返し強調したという。浅蔵は、北出が没するまで種々指導を仰いでいるが、昭和37(1962)年に日展の審査員に推挙された時、東京の北出から「上野の山に花開く」という文面で電報の通知を受けた感激は、生涯忘れぬ思い出であるという。こうした関係から平成4(1992)年秋、浅蔵は文化功労者に顕彰され(文化功労賞)、早速、師八十吉と塔次郎の墓前に報告している。



白陽夏ノ松 花盛



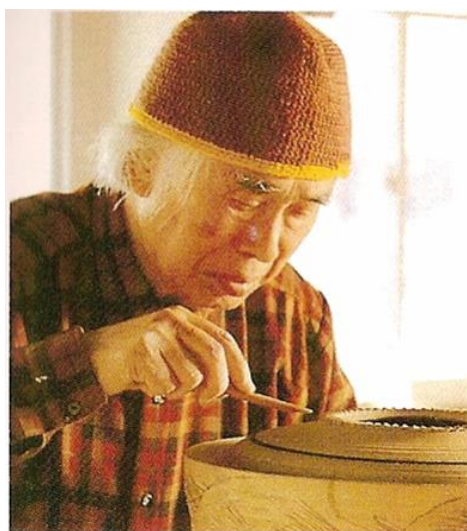
四季の花 陶板

◇技法の創出

浅蔵五十吉が最初に師事したのは初代徳田八十吉である。八十吉の古九谷や吉田屋風な深い色絵の具の扱い方を学んだ。そして、次に北出塔次郎の近代的な九谷焼を学ぶ。八十吉の古九谷と北出の近代的な九谷が巧みに組み合わせられ、五十吉によって独特の現代九谷が形成された。

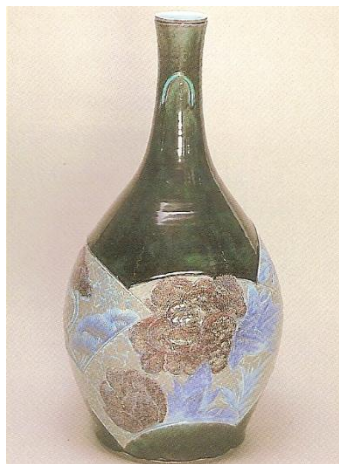
五十吉は作風を10年ごとに変えるよう努めた。昭和20(1945)年代の作品は徳田工房時代の延長線上にある色絵中心の作品がほとんどで、作風も絵画的なものがその中心をなしている。

昭和30(1955)年代に入ると、今までの作品では現代的な感覚を盛り込むには不十分として、素地作りに入力を入れて、いろいろと工夫を施す。表面に浮き彫りや盛り上げを施し彩色をした磁彩、素地が十分に乾かないうちに線彫りや陶彫を行って彩色をした刻釉などの技法を使っている。従来の色絵のみでは表現できない新鮮な感覚を作品に盛り込んで、新しい世界を開く



ことに成功した。

30歳代後半から40歳代に入ると、20歳代の技法をさらに一步進めた新しい技法の展開を始め、昭和21(1946)年に日展に初入選した。磁象という技法で、濃縮率の異なる2種類の陶土を使い、焼成の後、表面に現れた亀裂の効果を生かし賦彩する方法であり、焼きの磯吉から学んだ基礎が活かされている。色絵付けのみではどうしても仕上がりが平板になりがちな欠点をカバーするとともに、現代的な浅蔵独自の方法として、創出された技法である。こうした新しい技法によって、九谷の色絵の世界を広げるために大きな役割を果たしており、絵の部の色調の醸し出す雰囲気とあいまって独特の世界を表現している。

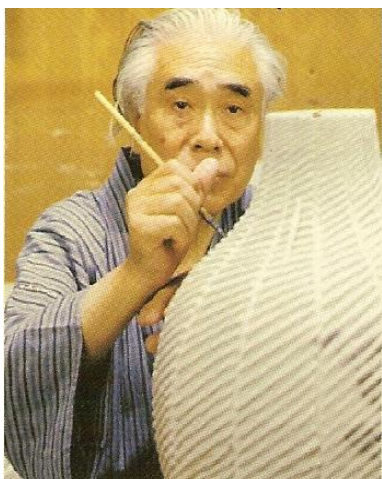


扇面の花 飾瓶



刻彩佐渡の印象飾鉢
(日本芸術院賞受賞作品)

◇展開する色釉の世界



しかし、従来からの九谷の絵の具は、五十吉が求める深い色調を表現するには不向きであり、早くから絵の具の改良研究に心血を注いでいる。幸い徳田工房時代に担当した絵の具の調合摺りの仕事から、調合技法に関する知識を早くから習得していたので、その後の五十吉の絵の具改良を創製するのに大いに役立ったという。

五十吉の絵の具の色調を見ていると、青手古九谷や吉田屋の中心とする青九谷の緑、黄、紫の三彩が基調をなしているが、これはあくまでも九谷の伝統の色調を受け継いで守り、発展するために固執する色調である。しかし質感は従来からのガラス分の多い透明釉ではなく、艶消しに近い肌合い

を有している。これが浅蔵の言う潤いのある色感に結びついている。こうした絵の具を創製するために、従来からの九谷五彩の絵の具に、種々の物質を混ぜて工夫を重ねている。全体としては暗くて深い味わいを表現するために、尾小屋鉦山の廃棄物を混ぜて使用しており、特に浅蔵カラーといわれる黄絵の具の色調は、他の誰にも見られない独特の深みのある色調を有している。そして、焼き締め素地に直接呉須で線描し、その上に絵の具を賦彩して焼成すると、焼き締め素地に呉須が浸み込んで、<にじみ>の効果を表現し、また絵の具も素地に広がって重なり合い、従来からの上絵付けとは一種異なった複雑な色調の世界を表現することに成功した。こうした色釉の賦彩法に、線彫りや陶彫、磁象の技法を盛り込んで、

主として草花や花鳥を中心に表現された色絵の世界は、何か幻想的な美しさを見せており、それは次第に広がって、建築空間にまで及んでいる。浅蔵は、10年ごとに新しい作品に挑戦するように心がけていたという。そして、晩年は“無の色”に取り組んだ。九谷に生まれ、九谷で育ち、九谷で仕事をする以上、伝統的な色を大切にしたいという浅蔵五十吉。晩年は九谷の銀彩を応用した新しいプラチナ色彩の創出など、その色釉の世界は、時代とともに歩み流れ、変化に富み、複雑さと単純さを微妙に絡ませながら、その後ますますその深さや味わいを広げ、見事に展開していった。

浅蔵家の展示場には、正面に120cm余りのとてつもない大皿が鎮座し、初代磯吉と二代五十吉、三代五十吉(本名：興成)の親子三代の深い芸術空間がある。小松商業高校正面の九谷焼の校章は、三代の作品である。

資料提供 五十吉深香陶窯

・受賞歴・受章歴

- 昭和3(1928)年 第1回日展に入選、以来連続入選
- 昭和43(1968)年 北國文化賞
- 昭和52(1977)年 日展内閣総理大臣賞
- 昭和56(1981)年 日本芸術院賞
- 昭和59(1984)年 勲四等旭日小綬賞
県内の陶芸家として初の日本芸術院会員に就任
- 平成4(1992)年 文化功労賞
- 平成5(1993)年 日展顧問に就任
- 平成8(1996)年 文化勲章受章

4. 人間国宝 三代 とくだ や そきち 徳田 八十吉



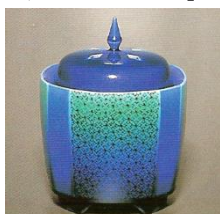
◇生い立ち

昭和8(1933)年に小松市に生まれる。祖父に初代徳田八十吉・父に二代徳田八十吉の後継者としてこの道に入る。幼い頃から英才教育を受けてきた八十吉は、家に入りにしていた画家に「九谷焼が好きか」と聞かれ「嫌い」と答えたという。「嫌いか、なら九谷焼をやればいい。」といわれ、以後八十吉は今の道に進むことになる。若い頃の八十吉は、時には偉大な2人の師を持ち、時には九谷焼上絵師の独特の世界に押しつぶされそうになることもあった。ダンスの教師などの道を志す時期もあったという。そのような八十吉に九谷焼作家として目覚めさせたのは祖父の死であった。若き苦悩する彼

を、祖父から渡された1冊の黒い手帳と友人の父親から渡された1冊の本『ソクラテスの弁明』が、三代八十吉を目覚めさせたという。祖父は九谷焼の釉薬ゆうやくの調合を長い経験により細かく手帳に記し、孫である八十吉に伝授することで徳田家三代として、その将来を託した。しかしながらその後、日展に連続して落選するなど決して平坦な道ではなかった。ようやく30歳の時器「あけぼの」で日展に入選する。当時は日展に入選すること



器“あけぼの”



耀彩小紋角香炉

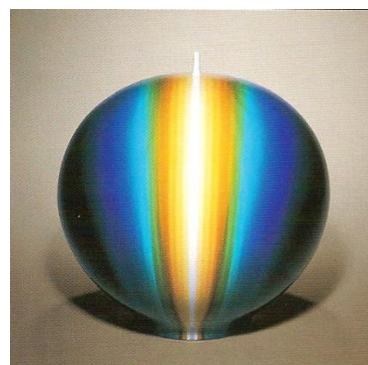
が中央に進出するための登竜門であった。それ以来独特の技法により次々と作品を発表することになる。昭和63(1988)年三代徳田八十吉を襲名する。襲名してからも国内外で展覧会を開き、数々の賞を受賞する。

平成9(1997)年6月6日満63歳で重要無形文化財「彩釉磁器」保持者(人間国宝)に認定される。

◇作 風

三代八十吉は、初代祖父から上絵釉薬を伝授、二代父から現代陶芸を学んだ。九谷焼の五彩ごさいとは黄色・紫色・緑色・紺青色・赤色と言われているが、八十吉は黄色・紫色・緑色・紺色こんじょうを使っている。『色使いの間に中間色があっても良いのではないか』と気づいた八十吉はこの4色の組み合わせでいろいろな色を作っている。壺や皿には絵を描くのではなく、ぼかしを取り入れた色で表現している。

「天の川」や「花」などを題材とした数々の作品を手がけている。その透明感あふれる作品は国外にも紹介されている。引き込まれそうな濃紺と淡いぼかしの色との、言うに言われぬ幻想の世界を表現している。



耀彩壺“恒河”

◇技法の創出

三代八十吉の技法は、祖父と父に教わった表現をもとに現代風に表現した『彩釉磁器』である。八十吉特有の色使いは、誰も表現することのできない唯一の作品である。誰もが魅了される色合いには緑色と紺色に黄色を混ぜた碧明釉・紺色と紫色を混ぜた深厚釉・ほか、色釉そのものによる抽象表現の極限に挑み「耀彩」とした。それらの色下の左の写真のロクロを引いている人は陶房の職人さんである。取材に訪れた我々に実際にどのようにして形を作っていくのかを、まるで手品のような早技で見せてくれた。それを乾燥させ、まず、素焼きを800～900℃、次に、本焼きを1,280℃で焼く。その後、上絵付け。上絵の1回目の焼き(850℃以上)である(中央の写真)。2回目の上絵焼きは温度を上げて1000～1050℃で焼く(右の写真)。実際には多数の色の小鉢を持ち、1つの素地に細かく引かれた線の間を仕上がりがぼかしとして表現される様に色付けをしていく。その150種類以上の釉薬からどの色を表すのかは、まるで化学の世界であり、その調合には決して妥協することの無い八十吉の作品に対する思いが込められている。上絵焼きをした上に更に色を重ねて2回以上焼くことで、その色と後付けした色が融け合い、緻密に計算された作品に偶然が重なり、その作品の幅を広げているという。気の遠くなるような試行錯誤する日々が続いたという。どの釉薬をどの割合で調合すれば、どの色がでるのか、また、焼いたときに思った色にならないことも多かったという。決して妥協のない努力が三代八十吉の「耀彩」を作り上げた。



◇現代九谷焼の祖と云われる2人の徳田八十吉



初代 徳田八十吉 (号 公暉・鬼佛)

(国指定無形文化財)

明治6(1873)年11月20日生まれ

昭和31(1956)年2月没



二代 徳田八十吉 (号 魁星・百吉)

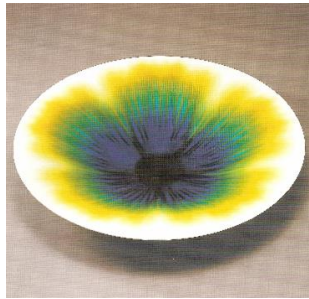
(石川県無形文化財)

明治40(1907)年11月6日生まれ

平成9(1997)年9月没

この二大作家を、三代徳田八十吉はもとより、浅蔵五十吉・吉田美統も師と仰ぐ。

◇徳田八十吉作品の中から（徳田陶房ギャラリー）



耀彩鉢“輪華”



耀彩輪華文鉢

◇親子三代の作品展（初代徳田八十吉展から）

初代 徳田八十吉作品



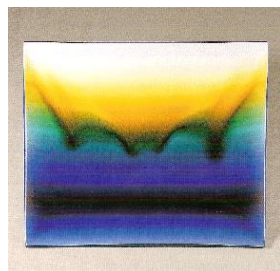
闘鶏図平鉢

二代 徳田八十吉作品



笹花図飾皿

三代 徳田八十吉作品



耀彩角皿「黎明」

資料提供 徳田陶房

5. 人間国宝 よした みのり 吉田 美統

◇生い立ち

吉田美統みのり(本名：吉田稔みのる)は、昭和7(1932)年に小松市の錦山窯の三代として生まれる。昭和16(1941)年に父清一が亡くなり、高校在学中から古い職人達や二代徳田八十吉に陶芸技法を学び始め、昭和26(1951)年に家業を継いだ。単に九谷焼“錦山窯”の三代を継ぐばかりではなく、陶芸作家への道を志すようになった。金沢市の石川県工芸指導所(現：建設会館：弥生町)で各分野の若い作家達とその技術を磨く。そこは、県が数ある伝統工芸の若手の後継者の育成のために設けたものであり、吉田を始め、たくさんの作家達の技術の研鑽けんさんの場であった。また、そこでは伝統工芸のための試験研究を行ったり、新しい“意匠”いしょうの開発アドバイスをしたりした。



金属工芸の高橋勇かいしゅう(介州)所長を始め、各分野の専門家が揃っていて、石川県の伝統工芸の支えになっていた。当時の美術専門学校(現：金沢美術工芸大学)以上の施設を持っていたという。美大の学生も沢山通っていた。その頃に、大阪での加藤土師萌かとうはじめの遺作展で氏の釉裏金彩ゆうりきんさいの作品に感動し、以後釉裏金彩と生涯向き合っていくことになる。あえて師を挙げるとすれば二代徳田八十吉と加藤土師萌であるという。

◇作 風



い草文

淡い色調の釉薬で下地を仕上げ、その上にまるでパズルを貼り合わせたように金箔をあしらい、その上に透明な釉薬をかけて焼く。穏やかな色調を基に、鈍い金の光が何とも言えないコントラストをかもしだしている。試行錯誤の上、見出したのが黄緑色の釉薬であったという(萌黄色)。銅の緑青から出る緑が金箔に1番合う色であるという。従来の九谷焼の五彩ごさいは、確かに緻密な色を塗る作業の積み重ねであり、素地に書き込むことで作品を作ってきた。吉田の作風は、そこに使われてきた“金”の大胆な利用により、透明感あふれる不思議な世界を見せている。バックとなる素地の色合いも工夫を凝

らし、九谷焼の五彩を使いながら金箔の持つ輝きに合った色使いを研究する。どの色合いも淡く金箔の良さを最大限に引き出している。そして、金箔に1番合う下地は“萌黄色”であると、長い試行錯誤の結果たどり着いた自信が作品からも伝わってくる。緻密な計算と作業から独特の九谷焼の世界を作り上げている。

◇技法の創出

釉裏金彩ゆうりきんさいは、陶磁器の素地に金箔や金泥などの金彩を用いて文様を描き、その上に釉薬ゆうやくをかけて焼き上げる技法である。金箔の扱い方や焼成法などから、陶芸技法の中でも極めて難しいものの1つである。吉田は、大阪で加藤の作品から受けた感動によって金箔を重ね合わす手法を生み出した。新しい技法を模索する中、金箔を切って素地に貼り付ける方法を考える。金箔は薄くて柔らかく、切り出



しナイフや普通のハサミでは切りにくく、取引先の箔屋が和紙と和紙の間に金箔を挟んで切る方法を提案し、友人の外科医の提案により外科用器具を用いることで作品制作がずいぶん楽になったという。それまでは、直線で切った金箔を貼る作業が精一杯であり、まだ丸い形に切ることはままならず、“い草の文様”を作るために穴あけパンチを使って丸い形を表現した笑い話の様なエピソードもある。また最適な箔の薄さを開発するのに2～3年かかった。最初の頃は、ストライプの模様しか作れなかったという。吉田の技法は、細かくパズルのように切り離された金箔を幾重にも貼り合わせることで厚みを出し、金粉をあしらうなどの技術も併せて作品を仕上げていく。そして、金沢が金箔の産地であったことも吉田の作家活動に功を奏した。左の写真は図案の上に金箔を貼り合わせているところである。



現した笑い話の様なエピソードもある。また最適な箔の薄さを開発するのに2～3年かかった。最初の頃は、ストライプの模様しか作れなかったという。吉田の技法は、細かくパズルのように切り離された金箔を幾重にも貼り合わせることで厚みを出し、金粉をあしらうなどの技術も併せて作品を仕上げていく。そして、金沢が金箔の産地であったことも吉田の作家活動に功を奏した。左の写真は図案の上に金箔を貼り合わせているところである。

資料提供 錦山窯陶房

6. 多くの重要文化財を建てた天才棟梁 山上善右衛門嘉廣

☆略歴

- ・生年不詳 1600年頃～延宝8(1680)年
- ・建仁寺流を受け継ぐ加賀藩の御大工
- ・加賀藩大工の鼻祖(元祖)ともいわれている。
- ・寛永5年から利常に仕え、藩内の有名なお寺やお宮を数多く建てた。

☆家系

山上家は、「横山吉春十五代の孫」という坂上右近大夫の一族、坂上十右衛門を登用。十右衛門は慶長5(1600)年に切米三十俵二人扶持で加賀前田家の御大工となった。そして、建仁寺派の元祖「横山吉春」の山と「坂上十右衛門」の上を取り、山上十右衛門と改名した。その山上十右衛門の女婿となったのが、坂上右近大夫の子である善右衛門嘉廣。善右衛門嘉廣は寛永5(1628)年、山上家の跡目を継いで山上善右衛門嘉廣となり、加賀前田家御大工として切米五十俵を与えられている。



那谷寺の鐘楼

☆優れた建造物の数々

小松の那谷寺・小松天満宮、羽咋の気多大社・妙成寺、富山(高岡市)の瑞龍寺が特に有名。

この山上善右衛門嘉廣は「加賀藩大工の鼻祖」といわれるくらい加賀百万石の権威を建築に示した人で、作品は知られるだけでも多種にのぼる。

その一つ、万治2(1659)年完成の瑞龍寺は、本格的な唐様建築として今日もなお尊重されている。1本1本長さの違う木を、断面をひし形にして、100分の1ミリまで正確に切って組立てている。

これより先、寛永17年から19年にかけて建立した彼が手がけた建造物を見ても、かなり卓越した技量の持ち主であることが知られ、その彫物の妙に目が奪われる。

このように、天才的な技で国宝級の建造物を残した山上善右衛門嘉廣は、藩お抱えの大工棟梁として活躍する。そして山上家も、子孫代々加賀藩から御大工の地位を与えられ、最高位の御大工頭にもなり、明治まで受け継がれていくのである。藩政時代、御大工頭に任命されたのは35名しかいないので、小松天満宮や那谷寺は、いかに優れた人物によって建てられた貴重な建造物であるかがわかる。



瑞龍寺仏殿

7. 人間国宝 初代 魚住 為楽

◇生い立ち



鑄金家・人間国宝。明治19(1886)年12月、小松市龍助町に生まれる。本名安太郎。明治37(1904)年から大正5(1916)年まで大阪の仏具製造師山口徳蔵に師事し、鑄金技術を学び、中でも砂張の鈴の鑄造を研究する。大正6(1917)年帰郷し、金沢市長町で本格的に銅鑼の製作を始める。鑄物の中でも技術的に最も難しいといわれる砂張(銅と錫の合金で、たたくと良い音がするところから響銅とも書き、銅鑼、水指、花入れなどが作られている)の鑄物を独学で研究し、水差し、花入にも傑作があるが、銅鑼を最も得意とした。生来、音色に対する敏感な感覚に恵まれた。昭和10(1935)年帝展出品を機に帝国美術院長正木直彦から精神的な薫陶と制作上の指針を受け、翌年の改組第1回帝展に銅鑼で、同年の「昭和11年文展」に火箸で入選を果たしたが、正木の忠告で以後昭和30(1955)年の第2回日本伝統工芸展まで展覧会への出展を控える。昭和27(1952)年に北國文化賞、同年銅鑼で無形文化財に選定され、昭和30(1955)年に重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された。

◇銅鑼の製作



砂張銅鑼

銅鑼は鑄造と鍛造によって製作される金属製音響具であり、その起源は東南アジア及び中国に求められる。我が国では鎌倉時代から遺品があり、主として法会において使用されていたが、やがて茶道においても用いられるようになり、深く余韻のある独特の音響によって茶事を演出するための重要な役割を果たしている。音響の優れた金属とされている砂張とは、銅と錫の合金であるが鑄造には高度な技術を要する。鑄出された銅鑼は熱処理を加えて柔らかくし、音響振動の伝道が良くなるよう音色を考えながら、金属組織が均一に並ぶように繰り返し槌打ちして仕上げてゆく。これには優れた音感と高度で的確な鍛造技術が求められ、適切な音を得たところで熱処理をしながら漆着色をする。以上のように、銅鑼の製作技術は、工芸史上特に重要な地位を占めるものである。

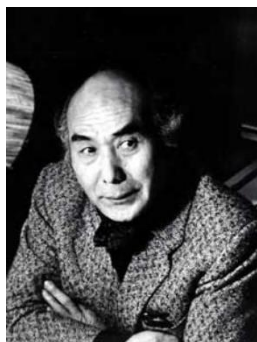
◇技法の創出

生来、音色に対する敏感な感覚に恵まれた為楽は、音響の法則を体得し、合金法、鑄造、熱処理、金槌仕上げ、着色等の至難な工程を開拓して音色余韻に優れた銅鑼を製作した。仏具師山口徳蔵に弟子入りし、仏具制作の傍らお鈴などの鳴り物の研究、鑄造に没頭する。やがて、茶席や軍樂、歌舞伎囃子などに使用される銅鑼の研究を始める。

昭和12(1937)年には名品「雲の井」を制作したのに続き、同13(1938)年には法隆寺夢殿厨子修理に参加した。その後、多く展覧会で賞を得るも、特定の師には就かず、砂張の研究に打ち込んだ。そして、工夫を重ね、独力で合金、鑄造、熱処理、金槌仕上げから着色に至る銅鑼作りの各工程を開拓した。

8. 「将来恐るべし。稀に見る写実の天才（藤田嗣治：評）」^{みやもと さぶろう} 宮本 三郎

◇略歴



1905年 5月23日 石川県能美郡末佐美村字松崎（現：小松市松崎町）に
（明治38年） 生まれる
1920年（15歳） 旧制小松中学校（現：小松高校）を中退、神戸に転居
1922年（17歳） 神戸から上京し、川端画学校で
藤島武二に師事
1927年（22歳） 第14回二科展で『白き壺の花』
が初入選、以後入選を重ねる
1934年（29歳） 初の個展『宮本三郎油絵素描展』
を開く



大正9年 15歳

- 1938年（33歳） ヨーロッパの洋画を学ぶために渡欧する
- 1939年（34歳） 第2次世界大戦の勃発に伴い帰国
- 1940年（35歳） 陸軍省嘱託として小磯良平らと中国北部へ従軍画家として赴き、約3ヶ月滞在。戦争記録画制作を行う
- 1942年（37歳） 南方（タイ・マレー半島等）へ従軍、戦争記録画制作を行う
- 1943年（38歳） フィリピン方面へ従軍、戦争記録画制作を行う
- 1944年（39歳） 石川県小松市白山町他に疎開（～1948年2月まで）
- 1945年（40歳） （財）石川県美術文化協会が設立され、評議員・企画委員に就任
- 1947年（42歳） 旧二科会会員の熊谷守一・田村孝之介ら9名と第二紀会を創立
- 1948年（43歳） 金沢美術専門学校教授就任（～1950年）。その功績が評価され、第1回金沢市文化賞功労賞を受賞
- 1952年（47歳） 文枝夫人とともに二度目の渡欧
- 1958年（53歳） 日本美術家連盟理事長に就任（～1960年3月まで）
- 1966年（61歳） 日本芸術院会員となり、翌年に社団法人二紀会初代理事に就任
- 1971年（66歳） 金沢美術工芸大学名誉教授に就任
- 1974年10月13日 死去（享年69歳）。遺作となった『假眠』を二紀展に出品
- 1975年 小松市松崎町に遺族により作品が寄贈、『宮本三郎画伯記念室』開館
- 1980年 小松市立博物館 分館『宮本三郎記念美術館』開館
- 1986年 宮本三郎の大回顧展が開催される。会場の1つ、小松市立博物館では、12日間で2万人以上が観覧した
- 2000年 1998年遺族により作品が寄贈、『小松市立宮本三郎美術館』開館



初の渡欧先にて
昭和13年～14年

宮本三郎は昭和画壇を常に牽引し、洋画家たちに影響を与えた。作風は人物を中心に自身の表現を模索しながら、「生」への畏敬に至り華麗な作風で人々を魅了した。

◇作品介绍

- 「**婦女三容**」：「第22回二科展」に出品され、宮本の才能を強く印象付けた初期の代表作。

明るい画面には、私淑していた安井曾太郎の影響が色濃く現れており、特に和服の女性は、安井の《婦人像》を想起させるが、衣装もポーズも異なる3人の女性を有機的に組み合わせ、調和の取れた画面を生み出しており、すでに安井を消化し独自のスタイルを築き上げるところに達したとみることができる。



婦女三容

1935年(昭和10)7月、宮本は世田谷区玉川奥沢町(現：世田谷区奥沢)に転居しており、本作が新築したアトリエで完成した第1作にあたる。その意味においてもまさに記念碑とも呼べる作品。ときに、宮本30歳。

- 「**清流**」：加賀市山中町 ^{かくせんけい}鶴仙溪に取材した作品。

宮本の故郷石川県小松市は加賀温泉郷で知られるいで湯の里でもあり、周辺に山中、山代、片山津、栗津といった温泉地が点在する。宮本も帰省の折にはあたりの温泉宿に宿泊している。



清流

取材地となった山中温泉は「鶴仙溪」と呼ばれる溪谷を挟む兩岸に開かれた温泉地で、溪谷には、奇岩、怪岩がいたるところに点在している。今日でもその流れは緩やかに迂曲しつつ、翠色の水を湛えている。^{みどりいろ}この溪谷には7つの橋が架かり、「これらの橋を全て渡れば、7つの福が宿る」と古くから言い伝えられている。戦後、郷里に疎開していた宮本はそのひとつ、こおろぎ橋のたもとに建つ^{ちようせんかく}聴泉閣に宿し、郷里の風景を写した作品が、記念すべき二紀会第1回展に出品されたことは非常に象徴的であろう。終戦の混乱期にあっても、これからの明日を切り開こうとする、宮本の確固たる決意が、この一瞬を切り取った眼差しの奥に感じられる。



寝たる裸婦



海女



窓際の女



人間群像

◇宮本三郎を顕彰する三つの美術館（各館のHPおよびパンフレットより引用）

・小松市立宮本三郎美術館 小松市小馬出町5

小松市出身の洋画家宮本三郎の作品を展示する美術館として、平成12(2000)年11月に開館。

石張り倉庫を利用した味わい深い建物である点も見所である。



・【分館】宮本三郎ふるさと館 小松市松崎町16-1

昭和55(1980)年に、「宮本三郎記念美術館」として、生誕地松崎町に建てられた。「小松市立宮本三郎美術館」のオープンに伴って、その歴史をいったん閉じられた。

現在は、分館「宮本三郎ふるさと館」として、作品のほか、資料や遺品の展示を行っている。



・世田谷美術館 分館 宮本三郎記念美術館 東京都世田谷区奥沢5-38-13

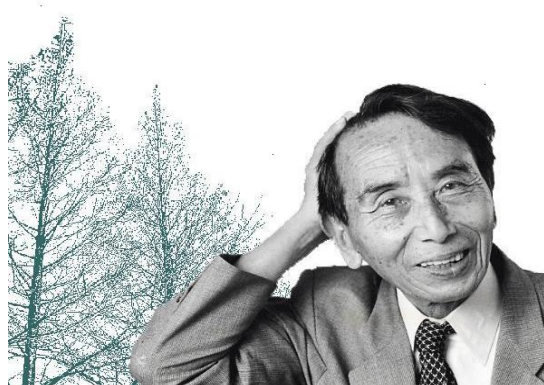
平成10(1998)年、世田谷区は宮本三郎のご遺族より、デッサンを含む膨大な作品群と、氏が居住していた土地の寄贈を受けた。宮本三郎記念美術館は、宮本三郎が、長きにわたり制作の拠点とした地に、世田谷区が新たに建設した美術館で、平成16(2004)年4月に開館した。



9. 我が町・小松に生きた作家 もりやま けい 森山 啓

◇略歴

- ・明治37(1904)年～平成3(1991)年
- ・詩人、評論家、小説家。
- ・本名は森松慶治。
- ・新潟県岩船郡村上本町(現、村上市)に生まれるが、父親の転勤で福井市に移る。福井中学校、第四高等学校(金沢)、東京帝国大学文学部哲学美学科へと進学する。
- ・戦前はプロレタリア文学に身を投じ、主に詩人・評論家として活躍した。
- ・生母の自殺をはじめ、何人もの肉親の死に遭い、自分自身も大病にも苦しんだ。
- ・「唯物論研究会」の思想弾圧と関連して若林署(東京・世田谷)に連行され、10か月間留置された。
- ・昭和16(1941)年に妻の郷里である小松市へ疎開^{そかい}。作家活動を行い、石川の文芸の隆盛にも尽力した。



※プロレタリア文学：労働者の生活に根ざした文学

◇代表作

☆「海の扇」「遠方の人」「風の吹く道」「野菊の露」「紅蓮物語」「谷間の女たち」等

- ・「遠方の人」(初出は昭和16(1941)年5月・『文学界』、戦後、大改訂がなされる)

作品は、ある思想事件に連座して孤独な謹慎生活を過ごした「私」が「彼ら」の物語を紹介するという構成で語られている。「彼ら」とは、北陸の地に流れ住みついた谷津伝八と彼の義妹の夏路、土地の子の潤吉である。伝八は誤って妻を殺し、出獄後は夏路の後見人として自ら任じ、力を尽くす。素朴で純粋な少年だった潤吉も青年となり、夏路への想いも憧れから恋心となるが、彼女は、男気があって自分のことを親身に想ってくれる伝八を恋するようになる。



伝八は夏路の想いを知りつつ、夏路と潤吉の結婚を望み、自らは誤りとはいえ妻に続いてまた人を死なせてしまった事件を償うように、断崖から海へ飛び降り自殺する。

- ・「風の吹く道」(昭和31(1956)年9月、『新潮』)

昭和21(1946)年4月、杉村は二足草鞋^{にぞくわらじ}の生活を辞めるべく勤務先の農・商学校に辞表を提出する。作家生活一本で生きようというのである。それは戦時中に徴用逃がれに勤め始めた教員生活に自分が向かないのではないかと、ということを経験した戦後の世相も一変した今も感じているからである。もちろん、教師を辞めることによって収入の保障された生活を失うことになる。以前までそれをイヤというほど知らされていた彼は最初決心が鈍った。最低の収入がありさえすれば戦中のように時流に媚びるような文章を書かなくともよいからだ。

しかし、決心が鈍る彼に踏切りをつけてくれたのは「文化」の編集部からの原稿依頼であり、作家の田上春彦からの激励の手紙である。そこで彼も初心に返る、～自分は徴用された時以外は、ペンだけで生きてきた。ペンだけで生きることに^{もうしゅう}妄執をもっている。これが青春時代からの願いだっただけではないか～と。こういう杉村の心境こそ戦後を迎えた作家・森山啓が再確認したものであったろう。「自分以外にこの加賀平野の戦中戦後の農民を、文学に書き遺すものはあないだろう」という自負に支えられて森山はこの地で作家活動を続けてきた。

【森英一「作品解説」（昭和63年10月『石川近代文学全集9 森山啓』）より参照】

☆映画化された作品

①「若いのち」 → 日活映画「雑草のような命」

原作＝昭和34(1959)年7月『小説新潮』にて発表。森山啓、55歳時の作品。

映画＝昭和35(1960)年1月21日公開。 出演：浅丘ルリ子・川地民夫

②「青い靴」（原題：「三郎と若枝」） → 日活映画「非行少女」

原作＝昭和37(1962)年7月『別冊小説新潮』にて発表。森山啓、58歳時の作品。

映画＝昭和38(1963)年3月17日公開。 出演：和泉雅子・浜田光夫

◎モスクワ映画祭金賞受賞

③「太陽が大好きだ」（原題：「太陽が大好き」） → 日活映画「太陽が大好き」

原作＝昭和38(1963)年4月『小説新潮』にて発表。森山啓、59歳時の作品。

映画＝昭和41(1966)年5月11日公開。 出演：浜田光夫・太田雅子(梶芽衣子)

◇小松商業高校との関係

- ・昭和19(1944)年から昭和21(1946)年の2年間、石川県立小松商業学校(小松商業高校の前身)と石川県立小松農業学校を兼務。国語、英語、農業の教師をした。(当時39歳)
- ・小松商業高校の校歌の作詞者である。
- ・代表作「風の吹く道」は、同校を舞台に、森山啓の教員時代を描いたもの。

教員になるきっかけ(自伝的小説「風の吹く道」より)

昭和17年に「白紙」を受けとり、徴用のための身体検査を受けたときに、勤労働員署長から「あなたのような経歴のひとは、学校へ勤める気はないですか。」と訊かれた。徴用を避けるために、知人の世話で学校へ勤める気になっていたため承諾し、勤労働員署長が小松農商学校へ電話をかけ、教員となったのである。

◇小松農・商学校の歩みと森松先生（※森山啓の本名は森松慶治）

（『根上文芸第22号』所収「評伝随筆森松先生のことなど」を参考）

昭和19(1944)年2月25日

文部省告示第137号により、石川県立小松農学校の設置が示される。同時に、既設の同商業学校は生徒を募集せず、自然消滅を待つことになる。

昭和19(1944)年2月29日

森松慶治(著述業、39歳)、小松商業学校教授(教諭?)^{しよくたく}嘱託となる(月90円、「徴用令」^{ちようようれい}を機に教職を選びペンを折る)。

昭和19(1944)年4月1日

小松農学校開校、商業学校の校舎に入る(農=1年生。商=2、3、4、5年生)。
森松教師(40歳)、商・農両校兼務となり、この年度、主として商の国語と英語を担当、生徒の動員先へも出向く。秋より翌2月まで(?)自ら申し出て、三重農林専門学校での農業科教員の講習を受ける(全国の新設農学校39校の関係者とともに)。講習の間、同校の寮に泊まる。

昭和20(1945)年3月27日

商業学校4、5年生が同時に卒業。この少し前、森松教師(41歳)その卒業記念写真におさまる(丸刈り、国民服姿)。

昭和20(1945)年4月1日

農学校と商業学校の生徒数逆転。
(農=1、2年生。商=3、4年生)
森松教師、この年度、主とし国語と農業実習を担当。



森山啓(前列右から二人目)

昭和20(1945)年8月

終戦(「徴用令」等の拘束力、事実上失効)

昭和20(1945)年11月

森松教師、『新潮』復刊号の、作家島木健作の追悼に森山啓の名でペンを執る(これが戦後の作家活動、文化活動への助走となる)。

昭和21(1946)年3月27日

商業学校4年生が卒業。この少し前、森松教師(42歳)その卒業記念写真におさまる(長髪、洋服姿)。

昭和21(1946)年3月30日

文部省より、4月に商業学校の復活設置の件認可される(同校の消滅危機は去る)。

昭和21(1946)年3月31日?

森松教師、農・商両校を辞職(教職期間は2年1ヶ月)。

◇地方文化への貢献

☆足跡

- ・昭和20年10月 石川文化懇話会こんわかいの結成。（「総務部と文学部(小説)」に所属）
- ・昭和20年 北陸詩人会の結成。
- ・昭和20年12月 石川文化懇話会から「文華」第一号刊行、編集たずさに携わる。
- ・昭和21年～22年 小松文化連盟の会長となる。
- ・昭和22年12月 「文華」誌上に森山啓、荒正人、平野謙の座談会「近代作家と民衆」が掲載された。
- ・昭和25年 小松・山彦詩友会の指導。
- ・昭和30年 「小松文芸」の作品審査。
- ・昭和33年 第一次小松文芸懇話会結成への協力。
- ・昭和48年～平成2年 泉鏡花文学賞の選考委員会への協力(選考委員)。
- ・昭和59年 第二次小松文芸懇話会結成への協力。
- ・小松商業高校を手始めに、県内中・高・専門学校の校歌を作詞する。

小松商業高校・加賀聖城高校・小松北高校・宝達高校・加賀高校・河北台商業高校
小松市立丸内中学校・平和町養護学校・小松女子専門学校

※上記の外、講演や持ち込み原稿てんさうの添削、序文や跋文ぼつぶんの提供等、地方文芸の中心的指導者として活躍した。

☆顕彰

- ・昭和18年 第六回新潮社文芸賞を得る。(39歳)
- ・昭和32年 北国文化賞を受賞。(53歳)
- ・昭和44年 小松市文化賞(第5号)を受賞。(65歳)
- ・昭和50年11月 小松市安宅町住吉神社境内に文学碑が建立される。(71歳)
- ・昭和56年 第34回中日文化賞を受賞。(77歳)
- ・平成元年 旧松任市文化産業功労者表彰を受賞(85歳)
- ・平成3年10月 小松で追悼特別展が開催される。(7月26日、87歳で死去)
- ・平成12年10月 小松市立図書館2階に森山啓記念室が常設される。(没後9年)
- ・平成16年10・11月 森山啓生誕100年記念として、三男・森松和風氏によって脚色された「紅蓮物語」ぐれんが上演された。(没後13年)

◇文学碑や森山啓ゆかりの場所

☆森山啓「市之丞と青葉」文学碑

- ・場所：金沢市東山一丁目観音坂下
- ・「市之丞と青葉」という作品は、過酷な運命を背負う若者二人のひたむきな愛や生き様を、封建的で非人間的な社会や権力への批判も込めて描いている。文学碑は、主人公・青葉が「松千代」という名の遊女として暮らしていた「金沢の浅野川の東卯辰山の麓の観音坂下」に、平成11(1999)年3月、金沢市によって建てられた。



☆森山啓文学碑

- ・場所：小松市安宅町タ17、安宅住吉神社境内横・安宅関跡
- ・昭和50(1975)年11月、小松市安宅町にある勸進帳でも有名な安宅関跡に、森山啓の文学碑が建てられた。碑文は当時71歳であった森山が、文を選び自筆したものである。

かれらは、
永劫止むこともないやうな
潮騒と松風の音に包まれ、
触れあふ手さへ全身に
燃え上るもののために震へた。
「遠方の人」より
森山 啓



森山啓文学碑

☆森山啓記念室

- ・場所：小松市丸の内公園町19、小松市立図書館2階
- ・森山家の見取図、蔵書、写真、自筆の原稿等が置かれている。また部屋の1部を再現したスペースがあり、当時の書斎の様子が見える。記念室では、森山啓の足跡や業績をたどるとともに、本等によって紹介されていないことも発見することができる。



☆小松商業学校(現・石川県立小松商業高校)校舎跡

- ・場所：小松市芦田町2-69

小松市立芦城中学校敷地内

県立小松商業高校は、大正10(1921)年に小松町立小松商業学校としてスタートし、令和2(2020)年に創立100周年を迎えた伝統ある学校である。その前身である石川県立小松商業学校は、小松実業高校、総合制小松高校(小松高校・小松農業高校と合併)、小松実業高校と変遷し、昭和38(1963)年10月に小松商業高校となり、昭和39(1964)年9月に校舎も希望丘10番地(当時は軽海町ル40番地)に新築移転された。



小松商業学校 校舎跡地

10. 演劇の振興に奔走した劇作家 きたむら きはち 北村 喜八

◇略歴

- ・明治31(1898)年～昭和35(1960)年
- ・劇作家、翻訳家、演劇評論家。
- ・小松町字泥町(現、小松市大川町)に米屋の長男として生まれる。
- ・芦城小学校から小松中学校(小松高校の前身)、第四高等学校、東京帝国大学英文科へ進学。中学時代は、詩・短歌・英語劇等、文芸活動を盛んに行った。同級生には、中谷宇吉郎がいる。
- ・数々の欧米戯曲を翻訳し、ラジオドラマや評論、随筆も発表。
- ・昭和25(1950)年、エジンバラにおける国際ペン大会に日本代表として参加。国際演劇協会日本センターを創設し、初代理事長となる。
- ・昭和26(1951)年に小松高校校歌を作詞。その他、第四高等学校中寮々歌(大正7年)、第四高等学校文科応援歌(大正9年)、母校の石川県立小松中学校校歌(大正14年)、美川小学校校歌(昭和27年)も作詞している。



◇代表作

☆歌集「こゝろの歌」(大正9(1920)年・喜八22歳の時の作品)

約400首が収められている。

- ・別れきて 火照れる頬にふりかかり とけゆく雪も涙の如し
- ・靴の下に 踏みしめる雪の快さ 犬のごとくに野をかけてみたし

☆主な戯曲

「狂人を守る三人」(大正15年6月『劇と評論』)

「山の喜劇」(大正15年9月『劇と評論』)

「勸進帳」(昭和12(1937)年3月『中央演劇』)

「美しき家族」(昭和17(1942)年7月 文園社刊・皇紀二千六百年奉祝芸能祭において「劇団賞」受賞)

「あゝ荒野」(昭和23(1948)年5月 文芸春秋新社刊、1933年・オニール作の翻訳戯曲)

☆その他

『芝居入門』(小山内薫の著書に喜八が補筆) 『世界戯曲全集』の編集

◇喜八のメッセージ

☆昭和26(1951)年10月、学制改革後の新制小松高校創立3周年記念「小松高校新聞」より
校歌披露式典に寄せる ～喜八氏から生徒への手紙～(抄)

敗戦日本を背負ってゆくのは年若い諸君である。二十年三十年後の日本が立派になるか
ならないかは、若い諸君の双肩にかかっているのである。これまでの日本は国際的に孤立
であって、狭い島国根性があった。今も、そういう気風が一掃されたわけではない。しか
し、これからの日本は国際間の一員として「世界の国民」として自己を見る必要がある。
広い視野と大きい気宇を持たねばならない。私が校歌で未来への明るく大きい希望をうた

ったのもこのためである。

しかし、いかに広い視野をもったとしても、空想だけが大きくても、足が現実から浮いては何にもならない。視野は国際的であっても生活は堅実でなければならない。自分の生活している郷里に結びつき、祖国に結びついていなければならない。自分の生活を精神的にも物質的にも豊かにするという努力が、祖国を立派にするという努力に結びつき、そしてそれに国際的な見方が反映していることが大切である。

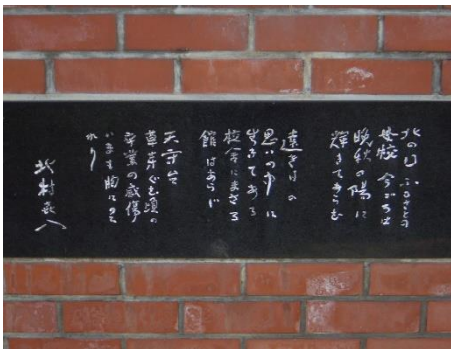
若い諸君のひとりひとりの自覚と努力があつまって、将来の日本がつくられてゆくのである。二十年三十年の後、国際間の一員としての日本が見ちがえるほどに立派になってほしいものである。

☆昭和34(1959)年10月、母校小松高校の創立60周年に招待されたが、欠席を詫びた手紙に送られていたもの

四十余年前のわが青少年時代を形成せし母校の今日の隆盛を見るは悦びにたえず、今菊花薫る佳き季節に創立六十周年を記念して祝賀を催しありと言う。われ病床にありて参ずる能わざれば、ここに追憶の情を歌に託して寄す

- ・北の国ふるさとの母校今ごろは 晩秋の陽に輝きてあらむ
- ・遠き日の思いの中に生きてある 校舎にまざる館はあらじ
- ・天守台草芽ぐむ頃の卒業の 感傷いまも胸にのこり

◇喜八を記念して



小松高校にある記念碑



村瀬幸子夫人

昭和49(1974)年「北村喜八特別展」が石川近代文学館で開催された。特別展記念行事として、公開座談会「北村喜八をしのぶ集い」が石川社会教育センターにて開催された。

昭和61(1986)年、石川県立小松高等学校に著書92冊を集めた「北村喜八文庫」が夫人・村瀬幸子氏の寄贈で開設された。

昭和63(1988)年10月、「北村喜八回顧展」が小松市立図書館で開催。オープンセレモニーに村瀬幸子・松本克平・北村不二雄(喜八の三男)夫妻・竹田又男市長・木下健二教育長らが参列した。同日、北村喜八生誕90周年記念俳優座公演、アルプーズフ作・袋生訳『八月に乾杯!』を上演。村瀬幸子と松本克平が主演し、喜八の故郷で公演をしたいという念願が叶った。

1 1. 雪と生きた科学者・随筆家 なかや うきちろう 中谷 宇吉郎

◇略歴

- ・明治33(1900)年～昭和37(1962)年
- ・科学者、随筆家。
- ・石川県江沼郡作見村字片山津(現、加賀市片山津温泉)に、六人兄弟姉妹の長男として生まれる。生家は、呉服と雑貨を扱う商家だった。
- ・錦城小学校から小松中学校(小松高校の前身)、第四高等学校、東京帝国大学理学部物理学科へと進学。
- ・大学時代の恩師である寺田寅彦(実験物理学、気象学、地球物理学に業績をあげ、また活発な文筆活動を展開し多数の随筆や俳諧作品を残した)の影響を受け、実験物理学を志す。
- ・大正14(1925)年、大学卒業後、理化学研究所で寺田研究室の助手となる。
- ・昭和3(1928)年、イギリスに留学し、キングス・カレッジ・ロンドンにて学ぶ。
- ・昭和7(1932)年、北海道帝国大学の教授となり、雪の研究を始める。
- ・昭和11(1936)年3月12日、世界で初めて雪の結晶の人工製作(人工雪)に成功。
- ・自身の病気、寅彦の死をきっかけに、本格的に随筆を書き始め、昭和13(1938)年『冬の華』を出版。
- ・雪や氷の研究を続け、数々の功績を残す。また、随筆、絵画、科学映画などにも優れた作品を残している。
- ・「雪は天から送られた手紙である」という名言で有名。

◇代表作

- ・冬の華
- ・イグアノドンの唄(『イグアノドンの唄』所収)
- ・私のふるさと(『イグアノドンの唄』所収)
- ・私の生まれた家(『朗』所収)
- ・由布院行(『冬の華』所収)
- ・一人の無名作家(『百日物語』所収)
- ・「日本石器時代提要」のこと(『百日物語』所収)
- ・雪雑記(『中谷宇吉郎集』所収)

◇宇吉郎ゆかりの場所

☆中谷宇吉郎 雪の科学館



中谷宇吉郎雪の科学館は、宇吉郎没後32年の平成6（1994）年11月に、加賀市潮津町に開館。宇吉郎の研究や、生前使っていた実験器具、愛用品などを見ることができる。

外観は雪をイメージした六角形で、広い公園と隣接しており、橋を渡ったところに入り口がある。

展示品の一つである、

『イグアノドン^{イグアノドン}の唄』に出てきた『ロストワールド』の本。宇吉郎は子供たちに『ロストワールド』の話^{ロストワールド}を聞かせた。イグアノドンの唄は、長男・敬宇が作ったものである。



☆宇吉郎の墓

雪をイメージした六角形の台座が特徴で、台座の各面に雪の形が彫られている。隣には宇吉郎の友人である茅誠司^{かやせいじ}による墓碑銘がある。



☆北海道大学



人工雪誕生の地の碑

昭和11（1936）年に中谷宇吉郎が北大理学部教授の、世界で初めて雪の結晶を人工的に作ることに成功した場所。研究を始めてから3年目にしてようやく成功したという。

その後、研究が重ねられ、降ってきた雪の結晶を見てどのような気象条件のもとで生まれ、成長したかを逆にたどることが可能になった。「雪は天から送られた手紙である」という言葉を残している。

12. 科学者であり俳人であった あめやま 飴山 みのる 實

◇略歴

- ・昭和元(1926)年、小松市上本折町に生まれた。
- ・芦城小学校、小松中学校へと進み、昭和19(1944)年に第四高等学校に入学する。
- ・家業が醤油醸造業であったので、昭和22(1947)年にこの醸造学を学ぶため京都大学農学部に入學し、発酵醸造学を専攻した。
- ・昭和25(1950)年に京都大学を卒業し、大阪府立大学の助手として就職。その後、静岡大学、山口大学などを歴任し、応用微生物学研究的の礎を築き、昭和63(1988)年「酢酸菌の生化学的研究」で日本農芸化学会功績賞と中国文化賞を受賞した。
- ・酢の研究では世界的権威者となった。
- ・俳人としても、「だえんりつ 楯円律」を運営し、朝日俳壇(朝日新聞)の選者としても活躍した。



◇主な著書

☆研究書 『酢の科学』

※酢の文化史、酢の醸造学、酢の生化学と酢酸菌のバイオテクノロジー、酢の食品化学に分けて大塚滋らとともに執筆(編集)した。

☆句集

- ・『おりいぶ』(1959年)
- ・『少長集』(1971年)
- ・『しんゆうしょうせつ 辛酉小雪』(1981年)
- ・『次の花』(1989年)
- ・『花浴び』(1995年)

☆その他

- ・『しばぶきお 芝不器男伝』(1970年)
- ・『季語の散歩道』(1984年)



市立図書館の飴山實コーナー

◇飴山の俳句について

☆句風

- ・俳句は第四高等学校での学徒動員中に芭蕉七部集を手引きに始めた。さわき きんいち 沢木欣一が戦後創刊した「風」に参加。自らも「だえんりつ 楯円律」を創刊した。
- ・有季定型を尊重した上で、平明単純を旨とする句風。だが、質感を重視しつつも、虚の部分の拮がりにも目を配る。概して温かく大らかで、素朴である。

- | | | |
|-----|---------------------------------------|----------|
| ☆俳句 | 柚の花や雨の <small>しずく</small> 雫も夕明り | 『次の花』より |
| | 雨蛙とびか <small>ろくわんじょうど</small> 羅漢浄土かな | 『辛酉小雪』より |
| | 田を植ゑしはげしき足の跡のこる | 『辛酉小雪』より |
| | ひとつぶの春の星あげ <small>るしやなぶつ</small> 盧遮那仏 | 『花浴び』より |

13. 医学に貢献した ^{かつき}勝木兄弟（『ふるさと小松の人とこころ』より）

◇勝木家

勝木家は、江沼郡額見村（現・小松市額見町）出身で、小松へ移り住んだのは万治年間（1658～1661）で、漢方薬等を商い、額見屋の屋号で次郎右衛門を名のり、代々町年寄（町の役人）を務めた由緒ある家柄である。

勝木新次・保次兄弟の父、勝木家11代目の直吉は小松市龍助町で内科の病院を開業したが、初老前に病死する。長男の直次が父の跡を継いで開業医となった。

◇労働衛生学の権威 勝木新次

芦城小学校から小松中学校へ進み、さらに京都の第三高等学校、東京帝国大学医学部に学んだ。卒業後、倉敷労働科学研究所に勤務し、労働衛生学の分野に進んだ。労働基準法や労働安全衛生法をはじめとする各種の重要法案の制定に携わるなど、国政レベルの審議委員会のリーダーとして、労働行政推進に貢献し、その功績によって、昭和34（1959）年勲二等旭日重光章を受章した。

趣味も多才で、特に俳句に造詣が深く、俳誌「露」や「風雪」を主宰するなど、文芸面でも活躍した。



◇聴覚生理学の世界的権威 文化功労者 勝木保次



保次もまた、兄新次の後を追うように京都の第三高等学校から東京帝国大学医学部に進んだ。師と仰ぐ橋田教授の勧めで、まず臨床の耳鼻科教室で学んだ後に、教授の生理学教室へ移る。その矢先に、昭和12（1937）年に戦争が始まり、戦地で幾度となく生死の間をさまよう苦しみを味わう。そんな保次を支えたのは、研究意欲をかき立てる『動物の感覚』という1冊の本だった。その本には「魚の側線器は、人間の内耳の原器である」と書かれている。その本からヒントをもとに「魚類の側線器の研究」に熱意を燃やした。

昭和24（1949）年、東京医科歯科大学へ移る。アメリカ留学やあらゆる動物を使った実験等、保次の精力的な研究によって、音として認識される過程の従来の考え方に誤りのあることが判明し、聴覚生理学の分野における国際的貢献となった。

その功績により、昭和47（1972）年に日本学士院会員に選ばれ、翌年には文化勲章を受章する。さらに、同55年、日瑞両国間の学术交流に貢献した功績により、スウェーデン国王からスウェーデンロイヤルポーラスター勲章（北極星勲章）が贈られた。

☆勝木賞

小松市出身の世界的な聴覚生理学者である勝木保次博士からの寄附金を活用し、昭和57（1982）年に創設された。

人文・自然科学に対する学習意欲が旺盛で、その成績が特に優秀な市内中学3年生に贈られる賞。



勝木保次の詞碑

14. 郷土の歴史研究に力を注いだ かわ よしお 川 良雄

◇略歴

(『ふるさと小松の人とところ』より)

- ・ 明治36(1903)年～昭和54(1979)年
- ・ 財産家の三男として小松市今江町に生まれるが、2人の兄の早世や父が残した借金のため、大学進学を断念する。
- ・ 芦城中学校長などを務めた。
- ・ 昭和27(1952)退職、石川県史編集室に勤め、『石川県年表』『石川県史・現代篇』の編集に参加する。
- ・ 「加南地方史研究会」の結成に尽力する。
- ・ 昭和39(1964)年に小松市文化賞、昭和49(1974)年に勲五等瑞宝章を受章する。



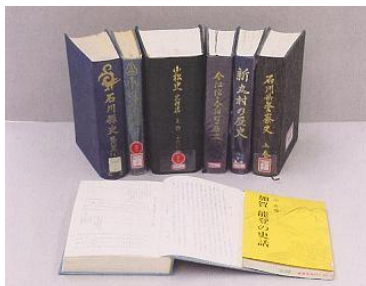
◇地方史への目覚めと研究への邁進

当時の校長職の給料に比べると、県史編纂の給料はとても安いものだったが、良雄は、長女の中学卒業と同時に校長職をふり捨てて、郷土史研究の道を選んだのだった。暮らしの不足分は、すみ夫人が教職の体験を活かし、塾を開いて収入を補い、良雄の志を支えた。

良雄の元には、研究に行き詰まると訪ねてくる学生もいて、そんな折の良雄は、ニコリともせずむずかしい顔で座っているのだが、史料を出して丁寧にしかも歴史に興味を持つように説明し、指導したという。

良雄は、幾日も幾日も書斎に閉じこもって古い文献と向き合うことも多く、1日中机の前に座りっぱなしで座布団下の畳が黒ずむほどで、部屋の整理も掃除も他の人にはさせなかった。家が湿気で傷み出して転居の話を持ち出しても、当時関係していた歴史研究の人たちへの愛着が深くて、転居を拒んだという。

◇数々の地方史編纂



良雄が携わった地方史は、『石川県史』、『小松市史』をはじめ、『今江町史』、『根上町史』、『寺井町史』、『西尾村史』など町史も数限りなくある。

この他にも、産業史、警察史、青年団史や『打ちこわしと一揆』、『遊女の墓』などの史実に基づいた随筆集も手掛けている。

倒れて命を落とすその夜まで、「ふるさと思い出写真集小松編」の執筆に追われていた。休まずこつこつと続けた地道な活動は、今日の地方史編纂に多大な足跡を残した。

☆川文庫

良雄が使った史料や出版した書籍は、後進の育成のためにと、昭和54(1979)年、すみ夫人により、小松市に寄贈された。現在、小松市立博物館に保管され、「川文庫」として、多くの人たちに利用されている。

15. 郷土料理・祭り料理

◇うどん

江戸時代、加賀藩に納められ、加賀藩御用達品として、徳川将軍家、大名家に贈られた他、俳聖・松尾芭蕉も食したとされる「小松うどん(当時は干し乾うどん)」は、江戸時代から300年以上の時と歴史を重ねた小松の名物。



＜小松うどん 定義八カ条＞

- 一、小松市内で製造された麺であるべし
- 一、手打ち、手打ち風のものであるべし
- 一、加水量は、小麦粉重量に対して35%w.w以上52%w.w未満を基準とすべし
- 一、食塩水濃度10%を基準とすべし
- 一、白山水系の水で仕込むべし
- 一、出汁は、うるめ、むろあじ、さば節等を主に用い、昆布をふんだんに使いひくべし
- 一、具材は、”じのもの”を出来る限り使うべし
- 一、こまつの発展を願い、茹で上げるべし

NPO法人 小松うどんつるつる創研

◇お旅まつりの料理

街を離れてしまった人も親類の人も、「お旅祭り」の時は、小松へ移動してくる。祭りの前日から、各家庭はもてなしの料理の調理に追われる。割烹『きたむら』のご主人、北村義正さんは、「最近では仕出しをとる家庭も多いが、昔は祭り料理を作るので大変だった」と懐かしがる。祭りに欠かせないのが、＜押しずしのササの葉ずし＞とくえびす。

押しずしはササ、トチの葉などに、酢でしめたサバ・小鯛・アジ・シイラなど季節の魚をのせ、その上に酢飯を載せたものを、いくつも重ね、押しして作る。押す力が独特で、握りずしほどやわらかくなく、大阪の押しずしほどしっかりせず……。 「使う葉、味付け、押し方に各家庭の特徴がありまして。押しした形が、魚のうろこに似ているところから、“ウロコずし”とも言います」と北村さん。



押しずし



えびす

＜えびす＞は卵の寒天寄せ。だしがしっかりと効いていて、おかずによし、おやつによしの甘さ。小松の人にとってはこれも“おふくろの味”の一つで、“えべす”“びろびろ”とも呼ばれている。

ほかに、家庭によっては、車麩、タケノコ、ゼンマイなどの煮物、身欠きニシンの昆布巻きなどが加わる。たくさん作った料理を必要に応じて鉢盛りし、客に出すのが習わし。とっておきの器も、祭りの時が出番となる。ご先祖様から伝わった器、地元産の九谷焼の器などが並ぶ。「タイの塩焼きや刺身は、婿さんなど大切な人がくるときに添えました」と、北村さんは子供時代を振り返る。そして、北村さんの作ってくれた料理に“母の顔”が映っているように感じた。

(平成10年5月産経新聞より)

16. 小松の方言

◇方言の出現

古代の方言の現状を知ることには大変難しいことだ。なぜなら、方言をきちんと記録したものがないからである。書き言葉はもともと規範的なものであって文献が残っていても方言は話し言葉なので残っていない場合が多い。しかし、8世紀の古事記、日本書紀、万葉集等の古い文献では、ことばの地域的な差のあったことが認められる。みやこ人と、東歌、防人歌を比較するとことばの違いがみえてくる。

11世紀から12世紀にかけて、京都の文化が発達したが、特に宮廷周辺の女の人が才能を大いに発揮した時代で、多分方言は栄えていただろうと想像される。

◇方言の発展

江戸時代を迎えると、農業を基礎とした封建時代250年が現代の方言を基礎づける大きな力を果たしたと考えられる。そして、戦乱の時代と違って方言の差がどんどん大きくなっていく時代で、方言が発達していった時代と考えられる。江戸時代までことばの中心、基準となってきたのは、上方・京都であった。ところが、江戸時代の中頃から文化の中心が江戸へと移動した。

◇標準語の普及 ～方言衰退の原因～

教育制度が整っていく一方、印刷技術も木版から活版印刷に変わり、新聞、雑誌、単行本もどんどん増え、言文一致の文章にのって標準語が普及していく。

交通も便利になり、人の交流も盛んになり、同じことばを使わなければ不便になってきた。また、工業の発達により農村より都市に人口が集まり、ここでも標準語が必要とされてきた。昭和初期、全人口の6割を占めた農業人口も激減し、専業農家も少なくなり、方言を育てていく農業社会の基礎が極端に弱まりつつある。マスコミの急激な発達も方言衰退に拍車をかけた。家庭の核家族化が進み、世代間のことばの伝達がなされなくなってきたことも方言を衰退させた。

◇方言の将来

方言は身近な人とくつろいで話す会話の言葉、日常の談話語である。地域に結びついた生活と地理的な制約を乗り越えていく生活との二重構造が現実

に存在している以上、方言と標準語が共存していくことは当然のことである。人々の口から何気なく出る方言は、地域に住む人々にとって、それぞれの意志と思考を相互に通じ合うことができる言葉の宝である。その地域の人情、風俗、習慣の中からいっばいの情感を込めて話すことは、標準語では不可能である。

世界の言葉の中でも繊細な感情を豊かに表現するといわれる日本語は、そのルーツである方言の中でも真価を発揮している。標準語に置換できないことば、長い間の歴史の繰り返しによって生まれた言葉、これら文化遺産ともいべき方言は、これからも存続するに違いないし、語り伝えていきたい貴重な文化である。



◇小松の方言

川本栄一郎の石川県の方言区画図によれば、石川県内の方言は概ね^{おおむ}河北郡と羽咋郡の境でまず北の能登方言と南の加賀方言に2大区分され、加賀方言はさらに金沢市を中心とした北加賀方言と松任市・石川郡(現：白山市・野々市市)以南の南加賀方言に分けられる。小松市方言は、その南加賀方言の中でも、加賀市と江沼郡(現：加賀市)を含む湖南方言に対して、松任市・石川郡(現：白山市)・能美郡(現：能美市、能美郡)の方言とともに湖北方言に含まれる。

(加藤和夫「石川県小松市郷谷川・滓上川流域の方言」より)

方言	意味		
あてげな	胡散臭い	こんじょよし	お人よし
あんにやま	娘さん	しまう	片づける
いえま	いいなさい	じょんなもん	変な人
いじっらしい	うっとうしい	こすい	悪賢い
うれっしゃ	嬉しい	…すんな	するな
えて	痛い	だらこいた	へまをした
おとろっしゃ～	びっくりした	たるい	気が抜けた感じ
おもしね	つまらない	ちゃんちゃんと	さっさと
かてこ	賢い子	ちょっこし	ちょっと
がんこな	手荒い	てんぽに	ものすごく
きかん	負けず嫌い	どうけ?	どうですか?
くさった	値打ちがない	どんならん	困ったもんだ
ぐず	のろま	ぬくい	暖かい
こきたない	不潔な	ねんね	子供
		ほして	そして

17. 小松の婚礼

◇特徴的なもの

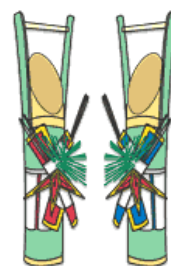
☆花嫁のれん

石川県の加賀地方から中能登地方にかけて、行われている慣習。花嫁が結婚式の当日に挨拶をするため、嫁ぎ先の家を訪れる。その時通常、仏間の入り口に、この花嫁のれんは掛けられ、花嫁はそれをくぐり、仏壇のご先祖にお参りをする。



☆合わせ水

花嫁が婚家の玄関で飲む水を「あわせ水」「一生水」などと呼ぶ。「合わせ水」を行う石川県では、婚家の水と実家から竹筒に持参した実家の水をひとつの素焼きのカワラケに同時に注ぐ。その水を花嫁が一口飲んだ後、同行した媒酌人^{ほいしゃくにん}夫人が「両家の水にあうように」との願いを込めて、カワラケを地面に打ちつけて割る。



「合わせ水」の絵

◇小松の結婚式の傾向

☆結婚式の歴史

江戸時代…家で執り行った。

明治後半…皇太子（のちの大正天皇）が神前式をしたことにより、神前式が広まった。

〈戦後〉—————→ 〈昭和40年代〉—————→ 〈60年代〉—————→
全国的に公民館（小松では公会堂も）等 神前式が主流 チャペル式が主流

☆式場の傾向

専門式場 → ホテル → ゲストハウスへ

※ゲストハウスとは、貸し切りの会場。または、同じ建物や敷地内にあっても、他の結婚式と鉢合わせにならないように入り口が別々になっている会場のこと。

☆合わせ水

新郎側の家でお参り。前述。

☆一生酒（半年～3ヶ月以内）

結納の前、新郎（父親＋仲人）が新婦側の家へ行きお酒をかわす。

☆結納、結納品

結納とは婚約成立のしるしに、両当事者かその親が金銭または品物を取り交わすこと。また、その儀式や金品。加賀地方では、結納をシメサゲ、ホンザケ、ウチアゲともいっている。この日は仲人だけ、または婿方の親を伴って、嫁方へ結納を持参する。結納品の他に、酒、土産類を持参するのが一般で、酒は赤い角樽に、「友白髪」とレッテルを貼った清酒二本を

添える。土産類は嫁に反物や指輪、両親にはそれぞれ上物のワイシャツ、反物、また嫁の兄弟姉妹、孫へも衣類や玩具などをやることが多い。

その他、「神前」として神酒、「仏前」として、線香、蠟燭などを添えるのが、この地方のしきたりとなっている。これら土産類の目録は、結納品とは別に用意し、添える。嫁方に着くと仲人は「本日はお日柄もようございますので、〇〇家から、手塩に掛けられました大切なお嬢様のご縁結びの印として結納を持参しましたので、お納め願います」と口上を述べる。嫁方でもこれを受けて、答礼の口上を述べる。結納返しは特別に行わないが、土産類の返しとして、嫁入り道具とともに、後日結納と同様な形式で贈られる。



結納式が終わると、以前は仲人を酒で接待したが、現在はこれを省き、「御膳代」と「御車代」を包み、茶菓子程度で済ませることが多い。したがって結婚式の日取り、会場、人数等の打ち合わせも他日に行われるのが一般である。石川県の結納金の平均は100万円。品目(目録、熨斗、酒(二本)、寿留女(十枚)、子生婦、末広、優美和、その他(神前、仏前))

☆披露宴の時

おちつきのもち(新婦が嫁ぎ先で落ち着くように)を食べる。



18. 小松の葬儀

◇石川県に特徴的なこと

- ・金沢では、9割以上の遺族が病院指定の葬儀社ではなく、自分たちで手配した葬儀社に寝台車を回してもらっているようだ。
- ・葬儀の場が、自宅あるいは公民館などから、葬儀会館へと変わっている。
- ・金沢は、葬儀会館を利用する人が95%もいる。
- ・人口比率に対して火葬場がきわめて少ない東京では、臨終から通夜・葬式に日数がかかる場合がある。遺体を冷蔵庫に保管して、火葬場の順番を待つ。こうしたときには、死亡通知状を発送したりするが、石川県ではそのようなケースはない。
- ・「香典返し」は、石川県では受付時に渡す「当日返し」が一般的。ところが関東・関西方面では49日の法要を済ませてから発送するという「後日返し」が比較的多いようだ。
- ・昔の北陸地方では、納棺の際、男性には剃刀、女性にはハサミを入れる「お剃刀(かみそり)の儀式」が広く行われていた。

※お葬式のすべて【石川の仏事 完全ガイド】 米永 章 北陸新聞出版局より抜粋

☆宗教別

仏教	9割	浄土真宗	7～8割
キリスト	1割未満	日蓮宗、曹洞宗、天台宗など	2～3割

☆小松市独特のもの

- ・祭壇スロープに、亡くなった人の近親者の名札を立てる。
- ・供物…頂いたお供え物(お菓子や果物など)を、中陰の御膳に着いた人にお下がりとして均等に分けてお返しする。金沢方面では、お下がり以外にも引き出物を付けることが多い。
- ・骨壺…火葬後すぐに骨壺に入れ、その足でお寺へ納骨する。(納骨日を別に設けない)
- ・中陰料理…精進料理を主体とする先膳と後膳がある。
 - 先膳…火葬場に親族が行っている間に、お手伝いをしてくれた人に労いの気持ちも込めて、先に食べてもらう料理。
 - 後膳…火葬場に行った後に親族が食べる料理。
- ・お剃刀の儀…法名を貰うための儀式。これはお寺で行われていたもので、亡くなる前に法名を貰っていない人が行う。



19. こまつの石文化

今から約2,000万年前、日本海側での活発な火山活動は、霊峰白山を生み出し、銅鉱床や瑪瑙^{めのう}、オパール、水晶、碧玉^{へきぎよく}の宝石群、良質の凝灰岩石材、九谷焼原石の陶石など大地の宝を生み出した。小松の人々はこの大地の宝を活用し、2,300年にわたり、時代のニーズに応じた人・モノ・技術が交流する豊かな石の文化を築き上げてきた。

平成28(2016)年4月25日、「『珠玉と歩む物語』小松～時の流れの中で磨き上げた石の文化～」が「日本遺産(Japan Heritage)」に認定された。

◇花坂陶石山

本多貞吉は懸命に陶石を探し歩き、たどりついたのが現在の小松市花坂町。良質の陶石を見つけた貞吉は花坂にほど近い地で若杉窯を築き、ほどなく各地に諸窯が興りさまざまな作風や技術が生み出されました。約360年の歴史を駆け足で振り返りましたが、花坂陶石がなければ再興九谷以降の発展はなかったのかもしれない。



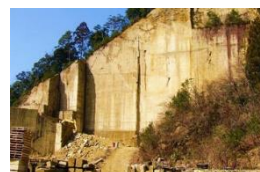
◇滝ヶ原石切り場

文化11(1814)年より始まり、現在も採掘が行われる緑色凝灰岩の石切り場。現在稼働する石切り場と旧の石切り場があり、前者では大型の電動鋸で掘削された300m以上真っ直ぐに延びる採掘坑が、後者では藩政期から明治期に人力で掘削した採掘坑が見ることができる。



◇観音下石切り場

大正初期から始まり、現在も掘削が行われる浮石質凝灰岩の石切り場。特徴的な黄色を呈し、湿気に強くカビが生えにくい特徴が評価され、国会議事堂や甲子園ホテルなど、全国の近代建築に利用されている。市内各所でも多く見られる石材で、石蔵をはじめとして石塀や門、庭の石造彫刻物などに使用されている。



◇遊泉寺石切り場跡

江戸期から採掘がなされた角礫凝灰岩の採掘場。第二次大戦末期には中島飛行機(現:富士重工業)が洞窟を利用して、部品を製造。総延長10km、8000㎡に及ぶ広大な迷路空間となっています。随所に地下水が溜まり、幻想的な光景を創り出しています。



◇鶺鴒川石切り場跡

飛鳥時代の河田山古墳の石室から近世の小松城の石垣、そして近代建築物にまで長い時代にわたって多用されてきた角礫凝灰岩石材の産地。大規模な洞窟工場1ヶ所は、ハニベ岩窟院として観光地となっている。



20. 小松市の主な文化施設

◇小松市公会堂 所在地：小松市丸の内公園町32

芦城公園にある多目的ホール。昭和34(1959)年に竣工。平成19(2007)年より、公益財団法人小松市まちづくり市民財団が指定管理者となっている。

■一階	第1・2会議室	各30人	72㎡
	茶室	20人	58㎡
	和室	20人	50㎡
■二階	大ホール	1,078人	
	特別室	10人	36㎡
■三階	第5・6・7会議室	各20人	60㎡
■四階	大会議室	100人	216㎡



◇小松市立博物館 所在地：小松市丸の内公園町19

県内初の登録博物館として、昭和33(1958)年開館。小松の歴史、美術、自然に関する資料を約5万点も収蔵している。

常設展2階では、「小松の歴史」というテーマで、小松城にまつわる資料や江戸時代からの九谷焼の作品などを展示している。3階では、日本遺産に登録された「小松の石文化」に関連して「こまつの石」を紹介。小松で採れた水晶やオパールなど、たくさんの鉱物が展示されており、人気です。常設展のほかに、年数回の企画展、特別展も開催している。また、自然観察会などの様々なイベントも行っている。



◇小松市立図書館 所在地：小松市丸の内公園町19

昭和56年11月2日開館

所蔵 約20万点

- 一階 閲覧室、親子読書室、視聴覚室
- 二階 参考資料、郷土資料
小松市ゆかりの作家『森山 啓氏』に関連した資料
(蔵書、原稿等)の展示室



◇南部図書館 所在地：小松市島町ヌ43 (南部中学校敷地内)

平成18(2006)年1月14日開館

所蔵 約5万点

- 南部中学校特別教室棟3階建のうち、1階部分
図書館、視聴覚室、会議室、和室、事務室、トイレ



◇小松市民センター 所在地：小松市大島町丙42-3

昭和59(1984)年竣工。大ホール(固定椅子548席)、小ホール(椅子350席)などの集会施設と、体育室(集会室を兼ねる)、会議場、聴覚室などのコミュニティ併設施設がある。

また、サッカー1面、ラグビー1面が可能な芝生のグラウンド、4面のテニスコートの屋外運動場がある。

さらに、浴室、機能回復室などの「老人福祉施設」と、児童集会室、児童遊技場、児童図書館などの「北部児童センター」とが同じ建物内に併設されている。



◇小松市埋蔵文化センター 所在地：小松市原町ト77-8

平成22(2010)年4月にオープン。小松市は重要文化財考古資料を2つ所蔵(矢田野エジリ古墳・八日市地方遺跡)する県内唯一の市町。遺跡のレベルが「量」「質」とともに北陸トップクラス。後世にその記録を伝えていくため、市内の遺跡を調査し、出土品を大切に整理・保管し、広く市民に公開する役割を果たす施設。出土品を公開する展示室では年数回の特別展を開催(展示観覧は有料)している。

施設内を見学できるほか、出土品から分かった古代の技術を体験できる人気のメニューも用意している。勾玉づくり体験・組みひも体験は年中行っており、他にも期間限定のメニューや体験イベントを行っている。また、実際に行われているお仕事も学ぶことができる。例えば、非常にもろい木器に科学的な処理を施す工程や、土器の破片をつなぎあわせて元の形に復元し、図面に記録する作業などが見学できる。



◇石川県こまつ芸術劇場うらら 所在地：小松市土居原町710

平成16(2004)年4月1日にオープン。小松市には、能や歌舞伎で有名な勸進帳の舞台となった「安宅の関」があり、お旅まつりでの曳山子供歌舞伎や日本こども歌舞伎まつり in 小松など、市民の間でも歌舞伎が盛んに行なわれている。こうした地域の伝統芸能を育む中、小松市で本格的な歌舞伎を上演できるホールをと実現したのが「こまつ芸術劇場うらら」である。

「うらら」は、「市民一人ひとりが明るく元気に、笑顔あふれるうらかな小松市になることを願って」という思いが込められている。また、「うらら」は小松の方言では「わたしたち」を意味している。

大ホールは歌舞伎を主目的としたホールで、市の木である松の葉をアレンジしたパネルの壁面や伝統工芸を取り入れた格子など、和風の要素をアクセントとしている。

小ホールは優れた音響性能を有しており、室内楽やリサイタルに適したホールで、曲線の多用や、内観の透明感のあるガラスの壁面により現代的なデザインとし、「新しい小松」をイメージさせるインテリアとなっている。

また、市民ギャラリー・催事場・小松駅前行政サービスセンター・ぶっさんや(小松市特産品などのお土産が豊富)も入っており、多目的に利用できる。



2 1. 文化財

◇国指定重要文化財（令和3年4月1日現在 17件）

那谷寺本堂（本殿・唐門・拝殿）

真言宗に属する自生山那谷寺は、養老元(717)年に僧泰澄が千手観音を、岩窟内に安置したのにはじまるといわれ、ついで花山法皇が行幸され、ここに参詣すれば西国三十三ヶ所の霊場巡礼にまさるとし、第一番の紀伊の那智山の那と、第三十三番の美濃の谷汲山の谷とをもって、那谷寺とされたと伝えられている。

平安時代の中頃には、温谷寺・栄谷寺とともに白山三箇寺の一として、寺領も多く僧兵もいたが、中世末の一向一揆の兵乱のためにすっかり荒廃してしまった。ついで、前田利常が寛永17(1640)年より再興をはかり、山上善右衛門嘉廣を棟梁として完成した。

本殿は三間四面、唐様で、岩窟内にあるので屋根を造らず、向唐破風付きの厨子に本尊千手観音を安置してある。唐門は向唐破風で柿葺、屋根面は傾斜させて建てられている。拝殿は懸崖造り、屋根は入母屋造り、軒は唐破風、千鳥破風で、四方欄間には、鳳凰、鶴、松、竹、梅、蘭、橘、紅葉などの花鳥を、1枚の枇杷板で透し彫りし極彩色を施した豪華なものだ。



那谷寺三重塔

三重塔は、本堂大悲閣に相對した西南の山腹にある。寛永19(1642)年9月に、前田利常が徳川家綱の誕生を祝って建立したことが、冶工釜屋宮崎彦九郎吉綱によって鑄造された露盤に記されている。

三間四方の3層で、宝珠頂までは高さ11.5mと小さい。1階に心柱を用いなくて、組立て積み上げの方法をとっている。したがって1階内部は広く、中央に鎌倉初期の作と伝えられる胎藏界大日如来が安置されている。3層とも扇垂木を用い斗拱組の優美さ、また、四方扉の菊花や壁面の唐獅子の彫刻はまことに巧妙をきわめている。



那谷寺護摩堂

護摩堂は護摩をたいて、延命息災、増益、敬愛、調伏などの修法をおこなうところ。

那谷寺の護摩堂は、大悲閣に相對した山上に、大きな8枚の台石上に建てられており、桁行三間、梁間三間の単層入母屋造りである。

外側周囲の腰板には、さまざまな姿態の獅子の浮き彫りがあり、その上段にはぼたんを浮かし、四方欄間の四季の花の彫刻も豪華なもので、極彩色を施したあとがある。各面にはそれぞれ三つ臺股の中に十二支のそれぞれの動物を彫刻し、それぞれの方角を示している。堂の内部側面及び格天井は、全部金箔押をした豪



華なものだ。正面中央に、平安時代の智証大師作といわれる不動明王を安置し、護摩壇(護摩を焚く炉を据える壇)が設けられている。

那谷寺鐘樓

鐘樓は護摩堂と同じ山の北方にあり、桁行三間、梁間二間、屋根は入母屋作り的那谷寺の重要文化財堂塔の中で唯一の和風建築である。この建造物は、基礎から石積みを袴腰の上まで築き上げ、石造りの台輪の下の外側に木造の袴腰を付けており、全国でも珍しいものとされている。この袴腰の曲線や三手先斗棋の美は建物の全体としての調和の美しさをかもし出している。内部には、戦国時代に朝鮮から渡来したといわれる名鐘がある。



那谷寺書院及び庫裡

那谷寺の寺坊は藩政時代には東の寺とよばれた不動院と、西の寺と称された花王院の二つがある。前田利常は正保4(1647)年に不動院に寺領70石を、更に承応4(1655)年に花王院に寺領30石を与えていたが、大聖寺藩の時代になっても、同額のものが支給されていた。

明治にはいつて花王院が廃止されて、不動院が那谷寺と改称されたのである。この書院及び庫裡は不動院のものであって、ほかの建物より数年古い寛永12(1635)年に建てられた。御成間・琴の間・鞘の間などからなる書院と庫裡は途中一部を改造されて使われていたが、昭和35年の解体修理の際、元の姿に復元された。

那谷寺庫裡庭園

那谷寺の庫裡がつくられたのと同時に作庭されたのが、この庭園である。県下でも古い庭園として知られている。

園中に歩石を布置して、ところどころに立てられた石はいずれも蘚苔におおわれている。東方に大杉と小池、西方には茶室如是庵、北の隅に椎の老樹があり、古色ゆかしい幽清なたたずまいを見せている。

作庭については、前田利常が作庭奉行の分部卜齋に命じたものとみられ、江戸初期の「遠州好み」の庭園といえる。「遠州」とは小堀遠州のことである。小堀遠州は天正7(1579)年に生まれ、名を政一、通称作助、号を宗甫、転合庵、弧蓬庵という。もと豊臣秀吉に仕え、のちに徳川家康に臣事し、慶長13(1608)年、従五位に叙せられ、遠江守に任ぜられた。このため一般に小堀遠州とよばれた。遠州は多芸多能な才人であり、茶道遠州流の祖として弧蓬庵山雲床、忘筌、転合庵、金地院八窓席、龍光院密庵席などをつくり、茶器鑑定にもすぐれていて、遠州七窯の名で知られる各地の楽焼窯をも指導した。また、和歌、書道にも長じていましたが、大阪城、伏見城、駿府城、二条城などの造営に関係し、有名な桂離宮や大徳寺弧蓬庵などの庭園もつくっている。正保4(1647)年2月6日に享年68才で没している。

小松天満宮本殿、石の間、幣殿及び拝殿、神門

小松天満宮は、小松天神、梯天神とも称され、俗に天神さま、梅林さんともよばれて、昔から人々に親しまれてきた。前田利常が小松城に隠居されていた時、祖先神として菅原道真を祭り、明暦3(1657)年に創建した。



社殿は、向拝、拝殿、幣殿、石の間、本殿を連ねた観現造り、入母屋造りの屋根となっている。本殿は桁行三間、梁間二間で、欄間には精巧な彫刻に極彩色をほどこし、柱などは黒く塗られた豪華なものだ。拝殿は桁行七間、梁間二間の入母屋造りで、正面は千鳥破風、向拝は唐破風だ。神門は、朱塗りの四脚門である。この二棟とも、山上善右衛門嘉廣を棟梁として建てられたことが棟札でわかる。江戸時代初期の建築の特色をよくあらわしている。

兀庵普寧墨蹟 (大慧宋杲答呂舍人法語) (縦32.6cm、横75cm)

兀庵普寧(1197~1276)は、無準師範の法嗣で破庵祖先の法孫にあたる。中国の西蜀の人で南宋代に活躍した名僧。文応元(1260)年に来朝し、北条時頼の帰依をうけ、鎌倉の建長寺第二世住持となった。禅風は激しく、また時頼の没後はよき理解者もなく法系の異なる蘭溪門下との不和などから、文永2(1265)年、滞在6年で帰国し、雲黄山宝林寺の住職となった。

本幅は、大慧系の禅門の祖として名高い大慧宋杲が呂舍人に対して悟道の要諦を説き与えた法語を掲げたもので、気骨たくましい兀庵普寧の書風を誠によく示す代表的なものだ。

兜一頭・袖・臙当各一双

多太神社には、木曾義仲が平家追討祈願のために、斉藤別当実盛が使用したといわれる兜、鎧の大袖、臙当、錦の直垂、表指矢などを寄進したものが、今日も所蔵されている。



斉藤実盛は、平家の部将であり、寿永2(1183)年に倶利伽羅の戦いに大敗したあと、退却をつづける平家の軍勢の中であってただ一騎、白髪を黒く染めて力戦奮闘したが、ついに手塚太郎光盛に討たれてしまった。

「むざんやな 甲のしたのきりぎりす」
俳聖松尾芭蕉が「おくの細道」の行脚の途、多太神社に詣で、この兜によせた感慨だ。

し て い ぶ ん か ざ い い ち ら ん
◇指定文化財一覧（令和3年4月1日現在）

●登録有形文化財（国登録有形文化財）（13件（31棟））

件数	No.	種別	名 称	員数	所在地	指定年月日
1	1	建造物	旧石川商銀信用組合小松支店	1棟	小松市	H15.9.19
2	2	建造物	戸市酒販酒蔵	1棟	個人所有	H16.11.8
3	3	建造物	小松市立空とこども絵本館 (旧小松警察署庁舎)	1棟	小松市	H19.5.15
4	4	建造物	東酒造場 大門	1棟	個人所有	H21.1.8
	5	建造物	東酒造場 翹室 <small>こまじしつ</small>	1棟	個人所有	H21.1.8
	6	建造物	東酒造場 検査室	1棟	個人所有	H21.1.8
	7	建造物	東酒造場 道具蔵	1棟	個人所有	H21.1.8
	8	建造物	東酒造場 桂松庵	1棟	個人所有	H21.1.8
	9	建造物	東酒造場 中蔵	1棟	個人所有	H21.1.8
	10	建造物	東酒造場 東蔵	1棟	個人所有	H21.1.8
	11	建造物	東酒造場 勝手口	1棟	個人所有	H21.1.8
	12	建造物	東酒造場 緑寿庵	1棟	個人所有	H21.1.8
	13	建造物	東酒造場 店舗兼主屋	1棟	個人所有	H21.1.8
	14	建造物	東酒造場 西蔵	1棟	個人所有	H21.1.8
	15	建造物	東酒造場 作業場	1棟	個人所有	H21.1.8
5	16	建造物	鈴木家住宅 主屋 <small>おもや</small>	1棟	個人所有	H24.2.23
	17	建造物	鈴木家住宅 店蔵 <small>みせくら</small>	1棟	個人所有	H24.2.23
	18	建造物	鈴木家住宅 土蔵 <small>どぞう</small>	1棟	個人所有	H24.2.23
6	19	建造物	長沖 金剛 <small>ながおき こんごう</small>	1棟	小松市	H27.11.17
	20	建造物	長沖 弁慶 <small>ながおき べんけい</small>	1棟	小松市	H27.11.17
	21	建造物	長沖 蔵 <small>ながおき くら</small>	1棟	小松市	H27.11.17
7	22	建造物	粟津演舞場 <small>あわつ えん ぶ じょう</small>	1棟	(一社)粟津演舞場	H28.11.29
8	23	建造物	旧北森酒店 店舗兼主屋 <small>きゅうきたもりさかてん てん ぼ けん おも や</small>	1棟	(社福)自生園	H28.11.29
9	24	建造物	法師 延命閣 <small>ほうし えんめいかく</small>	1棟	(株)善吾楼	H28.11.29
	25	建造物	法師 玄関棟 <small>ほうし げんかんとう</small>	1棟	(株)善吾楼	H28.11.29
10	26	建造物	那谷寺 普門閣	1棟	那谷寺	H28.11.29
11	27	建造物	小松市立錦窯展示館 主屋 <small>こまつしりつにしきかまてん じ かん しゅおく</small>	1棟	小松市	R1.9.10
	28	建造物	小松市立錦窯展示館 窯納屋 <small>こまつしりつにしきかまてん じ かん かま な や</small>	1棟	小松市	R1.9.10
	29	建造物	小松市立錦窯展示館 石蔵 <small>こまつしりつにしきかまてん じ かん いしぐら</small>	1棟	小松市	R1.9.10
12	30	建造物	旧下里家住宅主屋 <small>きゅうくだり け じゅうたくしゅおく</small>	1棟	小松市	R1.9.10
13	31	建造物	まつ家別邸吉祥庵 <small>まつ べつていきつしやうあん</small>	1棟	個人所有	R1.9.10

●国指定重要文化財（17件）

No.	種別	名称	員数	所在地・管理者	指定年月日
1	建造物	那谷寺 本堂（本殿・附厨子・唐門・拝殿）	3棟	那谷寺	S25.8.29
2	建造物	那谷寺 三重塔	1棟	那谷寺	S25.8.29
3	建造物	那谷寺 護摩堂	1棟	那谷寺	S25.8.29
4	建造物	那谷寺 鐘楼	1棟	那谷寺	S25.8.29
5	建造物	那谷寺 書院及び庫裡	1棟	那谷寺	S28.11.14
6	建造物	小松天満宮 本殿・石の間・幣殿及び拝殿	2棟	小松天満宮	S36.6.7
		小松天満宮 神門			
7	工芸品	兜・袖・臍当	1頭 各1双	多太神社	S25.8.29
8	工芸品	琴棋書画沈金文台・花鳥沈金硯箱	1基 1合	小松天満宮	S63.6.6
9	工芸品	木造獅子頭	1面	津波倉神社	H19.6.8
10	書跡	兀庵普寧墨蹟（大慧宋泉答呂舍人法語）	1幅	個人蔵	S49.6.8
11	書跡	往生要集（写本中巻）	1帖	聖徳寺	H1.6.12
12	考古資料	石川県矢田野エジリ古墳出土埴輪	一括	小松市	H9.6.30
13	考古資料	石川県八日市地方遺跡出土品	1,020点	小松市	H23.6.27
14	重要無形文化財保持者	釉裏金彩	—	吉田 美統	H13.7.12
15	有形民俗 文化財	白山麓西谷の人生儀礼用具	1,827点	小松市	S58.4.13
		白山麓西谷の民家	1棟		S59.5.22
16	名勝	那谷寺 庫裏庭園	1,134㎡	那谷寺	S4.4.2
17	名勝	おくのほそ道の風景地 那谷寺境内（奇石）	30,301.43㎡	那谷寺	H26.3.18

●県指定文化財（9件）

No.	種別	名称	員数	所在者・管理者	指定年月日
1	建造物	葭島神社本殿	1棟	葭島神社	S44.2.18
2	絵画	絹本着色光明本尊	1幅	個人蔵	S45.11.25
3	工芸品	萬曆五彩草花龍文瓶	1口	那谷寺	H19.4.27
4	工芸品	三彩金欄手龍文双耳瓶	1対	小松天満宮	H19.4.27
5	史跡	安宅の関跡	—	安宅住吉神社	S14.3.18
6	史跡	浅井暇古戦場	420㎡	小松市	H16.7.26
7	典籍	小松天満宮連歌書	15点	小松天満宮	S57.1.12
8	無形民俗 文化財	お旅まつりの曳山行事	—	曳山行事 保存会	H11.7.23
9	考古資料	八日市地方遺跡出土品	37点	小松市	H18.10.20

●市指定文化財（80件）

No.	種別	名称	員数	所在地・管理者	指定年月日
1	建造物	来生寺の寺門	1棟	来生寺	S38.11.3
2	建造物	牧姫塚の五輪石塔	1基	牧口町町内会	S40.11.3
3	建造物	小松天満宮の十五重の石塔	1基	小松天満宮	S40.11.3
4	建造物	曳山	8基	曳山行事保存会	S40.11.3
5	建造物	合掌造民家	1棟	作本 昌宏	S40.11.3
6	建造物	連房式登窯	1基	小松市	S48.11.2
7	建造物	菟橋神社の神輿	1基	菟橋神社	S50.11.1
8	建造物	本折日吉神社の神輿	1基	本折日吉神社	S50.11.1
9	建造物	菟橋神社本殿	1棟	菟橋神社	S58.11.1
10	建造物	島田白山神社本殿	1棟	島田町町内会	H5.11.3
11	建造物	石造多層塔	1基	滝ヶ原町町内会	H9.11.3
12	建造物	那谷寺茶室 如是庵	1棟	那谷寺	H11.11.3
13	建造物	滝ヶ原アーチ石橋群	5橋	小松市 滝ヶ原町町内会	H21.11.3
14	絵画	郡中御影	2軸	勸導寺	S38.11.3
15	絵画	仏涅槃図	1幅	建聖寺	S40.11.3
16	絵画	浄土曼陀羅絵図	1幅	法界寺	S42.11.3
17	絵画	絹本着色聖徳太子絵伝	2幅	正雲寺	S44.11.1
18	絵画	親鸞聖人絵伝	4幅	本蓮寺	S50.11.1
19	絵画	本折日吉神社の絵馬	1額	本折日吉神社	S54.11.2
20	絵画	前田利常画像	1幅	那谷寺	R2.11.5
21	彫刻	薬師如来座像	1軀	大王寺	S38.11.3
22	彫刻	不動明王座像脇侍共	3軀	小松市	S44.11.1
23	彫刻	芭蕉木像	1軀	建聖寺	S48.11.2
24	彫刻	木造十一面観音立像	1軀	波佐谷町町内会	H15.11.3
25	彫刻	木像十二神将立像	12体	瀬瀬町町内会	H27.11.3
26	彫刻	葭島神社の仏像		葭島神社	H29.12.29
27	工芸品	初代徳田八十吉作 九谷松鶴文九角大皿	1枚	小松市	S44.11.1
28	工芸品	魚住為楽作 砂張銅鑼	1口	小松市	H1.11.3
29	工芸品	真行寺の梵鐘	1口	真行寺	S46.11.2
30	工芸品	西照寺の梵鐘	1口	西照寺	S52.11.2
31	工芸品	銅造十一面観音懸仏	1軀	栗津町町内会	S62.11.3
32	工芸品	鱈口	1個	葭島神社	S62.11.3
33	工芸品	上宮寺の梵鐘	1口	上宮寺	H9.11.3
34	工芸品	粟生屋源右衛門作 竹林七賢人文木瓜形平卓	1点	小松市	H13.11.3
35	工芸品	那谷寺大悲閣鱈口	1点	那谷寺	H19.11.3
36	工芸品	鑄造三具足	各1点	小谷勝儀	H23.11.3
37	工芸品	葭島神社の仏具	5件(7点)	葭島神社	H30.12.27

市指定文化財（続き）

No.	種別	名称	員数	所在地・管理者	指定年月日
38	工芸品	来生寺 青磁三具足(香炉、花瓶、燭台) 附 共箱表蓋	1具、 附指定1枚	来生寺	R2. 11. 5
39	古文書	手の内の御書	1巻	波佐谷町町内会	S38. 11. 3
40	古文書	太閤検地帳	1冊	個人蔵	S40. 11. 3
41	古文書	十村石黒家文書	1括	個人蔵	S42. 11. 3
42	古文書	村鑑	1冊	個人蔵	S44. 11. 1
43	古文書	親鸞聖人遺文 二尊大悲	1幅	本覚寺	S48. 11. 2
44	古文書	蓮如上人御消息	1通	興善寺	S52. 11. 2
45	古文書	佐美の村御印	1通	佐美町町内会	S54. 11. 2
46	古文書	小野山陶器所記録	4冊	個人蔵	S56. 11. 2
47	古文書	明和六年烏兔記	2冊	称名寺	H5. 11. 3
48	古文書	加賀藩御大工渡部家文書	388点	小松市立図書館	H19. 11. 3
49	書跡	蓮如上人紙牌	1点	西照寺	H13. 11. 3
50	典籍	小松旧記	95冊	小松市立図書館	H3. 11. 3
51	歴史資料	旧新保村久保家道場資料	一括	個人蔵	H17. 11. 3
52	歴史資料	串茶屋遊女の墓	34基	串茶屋町町内会	H21. 11. 3
53	歴史資料	近世勘定村と本江村の水利慣行記録	2通・1体	東山町・本江町	H23. 11. 3
54	歴史資料	新保神社 神仏習合諸品	12点	新保町	H23. 11. 3
55	歴史資料	多太神社 回向札	19枚	多太神社	H23. 11. 3
56	考古資料	陶製水煙	1個	小松市	S60. 11. 1
57	考古資料	加賀古陶	9点	小松市	S62. 11. 3
58	考古資料	八日市地方遺跡出土弥生時代遺物一括	1括	小松市	H15. 11. 3
59	考古資料	埴田後山無常堂古墳主体部出土資料 一括	1括	小松市埋蔵文化 財センター	H30. 12. 27
60	考古資料	八里向山F7号墳主体部出土資料 一括	1括	小松市埋蔵文化 財センター	H30. 12. 27
61	無形民俗 文化財	悪魔祓い	—	向本折町伝統 芸能保存会	S38. 11. 1
62	有形民俗 資料	馬符	1面	那谷寺	S46. 11. 2
63	史跡	小松城本丸櫓台石垣	1基	県立小松 高等学校	S38. 11. 3
64	史跡	埴田の虫塚	1基	埴田町町内会	S38. 11. 3
65	史跡	御幸塚古墳	1基	今江町町内会	S38. 11. 3
66	史跡	仏御前屋敷跡・仏御前墓	1基	原町町内会	S38. 11. 3
67	史跡	前田利常公灰塚		河田町	R2. 11. 5
68	名勝	荒木氏の庭園	585 m ²	荒木良平	S44. 11. 1
69	天然記念物	赤穂谷のビヤクシン	1本	中海町町内会	S42. 11. 3
70	天然記念物	イロハモミジ	1本	村上清康	S42. 11. 3
71	天然記念物	尾小屋のミズバショウ自生地	1地区	尾小屋町町内会	S44. 11. 1
72	天然記念物	布橋のミズバショウ自生地	1地区	布橋町町内会	S44. 11. 1

市指定文化財（続き）

No.	種別	名 称	員数	所在地・管理者	指定年月日
73	天然記念物	おおすぎじんじや 大杉神社のイチョウ	1 本	大杉町町内会	S44. 11. 1
74	天然記念物	とくはしじんじや しやそう 徳橋神社の社叢		埴田町町内会	S46. 11. 2
75	天然記念物	大杉町のチャボガヤ	1 株	大杉町	S52. 11. 2
76	天然記念物	さくらばはんのきぐんらく サクラバハンノキ群落	1 地区	小松市	S54. 11. 2
77	天然記念物	よこたに しつちしよくせい 横谷の湿地植生 (ミズバショウぐんせい など)	1 地区	国	H15. 11. 3
78	天然記念物	あかぜ しちやまじんじや りん 赤瀬白山神社のツクバネガシ林	1 地区	赤瀬町町内会	H21. 11. 3
79	天然記念物	よしただけはたきやじんじや しやそうりん 吉竹幡生神社の社叢林		吉竹町	H25. 11. 3
80	天然記念物	たきがはら 滝ヶ原のホトケドジョウせいそくち ウ生息地		滝ヶ原町	H29. 12. 27

参考文献一覧

九谷焼関係

- ・ <http://www1.kagacable.ne.jp/~kamaato/hi.htm>
- ・ 『ふるさと石川』（石川県教育委員会）
- ・ 図録『特別展 歿後50年 初代徳田八十吉 古九谷・吉田屋の再現にかけた生涯』
(小松市立博物館)

人物関係

- ・ 地域教材作成研究会『ふるさと小松の人とところ』（小松市教育センター、2006年3月）
- ・ 石川県児童文化協会『こども石川県史 人物編』（石川県児童文化協会、1981年12月）
- ・ 金沢学院大学文学部日本文学研究室編『ふるさと石川の文学』
(金沢学院大学文学部日本文学研究室、2003年4月)
- ・ 飴山實監修『草木花歳時記 冬』（朝日新聞社、1995年5月）
- ・ 原谷一郎ほか『小松天満宮誌』（小松天満宮1982年12月）
- ・ <http://www.esse.yamanashi.ac.jp/~itoyo/basho/letter/hokushi.htm>
- ・ 能順H P <http://mpmembers.aol.com/j60409/6a3.html>
- ・ http://kawasotei.cocolog-nifty.com/easy/2007/04/post_e9ea.html
- ・ 内藤昌『近世大工の系譜』（ペリかん社、1981年）
- ・ 『石川近代文学全集9 森山啓』（森 英一編 昭和63年10月 石川近代文学館）
- ・ 森 英一『ふるさと文学者小伝森山啓』（平成12年3月 金沢市文化政策課発行）
- ・ 森 英一『物語 石川の文学』（昭和60年11月 能登印刷出版部）
- ・ 西田圀夫「評伝随筆 森松先生のことなど」
(平成15年3月14日 根上町公民館・『根上文芸 第22号』)
- ・ 正和久佳「森山記念室から」(平成14年10月～、小松文芸懇話会会員誌『文影』連載)
- ・ 三田薫子「森山啓」(昭和60年11月、能登印刷出版部・『風土への回帰 日本海辺の文学』)
- ・ 『県立小松商業高校 創立五十周年記念誌』（昭和45年9月 鶴川印刷）
- ・ 『ミリアニア 石川の近代文学』（金沢近代文藝研究会編 2001年11月 能登印刷出版部）
- ・ 『ふるさと石川の文学』（金沢学院大学文学部日本文学研究室編 2003年4月 北國新聞社）
- ・ 『石川近代文学全集15 近代戯曲』（井口哲郎編 平成2年8月 能登印刷出版部）
- ・ 森 英一『物語 石川の文学』
- ・ テレビ金沢「いしかわ大百科 四高ゆかりの人々シリーズ 第3回」
(平成14年6月2日放送)
- ・ 「小松高校新聞」(昭和26年10月、学制改革後の新小松高校創立3周年記念号)
- ・ 石川近代文学館ホームページ <http://www.kinbun.com/2shitunew.html>
- ・ 『石川近代文学全集13 中西悟堂・中谷宇吉郎・谷口吉郎』
(井口哲郎編、平成10年12月、能登印刷出版部)
- ・ 『ふるさと 石川の文学』
(金沢学院大学文学部日本文学研究室編 2003年4月 北國新聞社)
- ・ 「中谷宇吉郎雪の科学館」パンフレット
- ・ 石川近代文学館ホームページ <http://www.kinbun.com/2shitunew.html>

※写真提供

- ・写真提供：井口哲郎氏（前石川近代文学館館長）
- ・石川近代文学館ホームページ <http://www.kinbun.com/2shitunew.html>
- ・石川県立小松高等学校記念館

方言、郷土料理等

- ・ <http://shofu.pref.ishikawa.jp/portal/syoku/culture/yurai.html>
- ・ <http://www.akiya.co.jp/sub2.htm>
- ・ <http://www.kaga-style.com/onlineshop/shoku/gift/ocha.html>
- ・ <http://kagabiyori.seesaa.net/article/20723692.html>
- ・ 平成10年5月産経新聞・朝刊
- ・ 『町史にみる小松の方言』（小松市教育研究所、平成5年3月）
- ・ 加藤和夫監修『新頑張りまっし金沢ことば』（北國新聞社、2005年11月）
- ・ 加藤和夫「石川県小松市郷谷川・滓上川流域の方言」
（『小松市博物館 研究紀要34』小松市博物館、昭和10年3月）
- ・ <http://ww3.et.tiki.ne.jp/~morizen/hanayomenoren/hanayome01.htm>
- ・ <http://www.lets-bridal.com/manner/story03-2.html>
- ・ <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B5%90%E5%AQ%QA%E5%BC%8F>
- ・ 米永 章『お葬式のすべて【石川の仏事 完全ガイド】』（北陸新聞出版局）

文化財

- ・ 『小松市の文化財』（小松市文化財調査委員会、平成13年3月）
- ・ 陣出達郎監修『那谷寺』（北國出版社、昭和45年10月）
- ・ 『石川県の文化財』（石川県教育委員会、昭和60年3月）
- ・ 『ふるさと きらめき館 ー石川・富山の文化財ー』（北國出版社、平成23年8月）